

大學講義

全

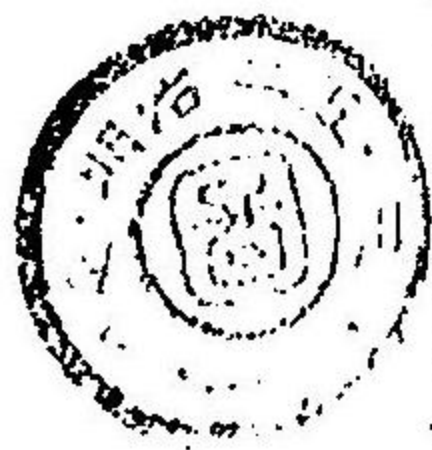
館書圖京東				
一	九	五	一	
	二		六	
冊	號	架	函	類門



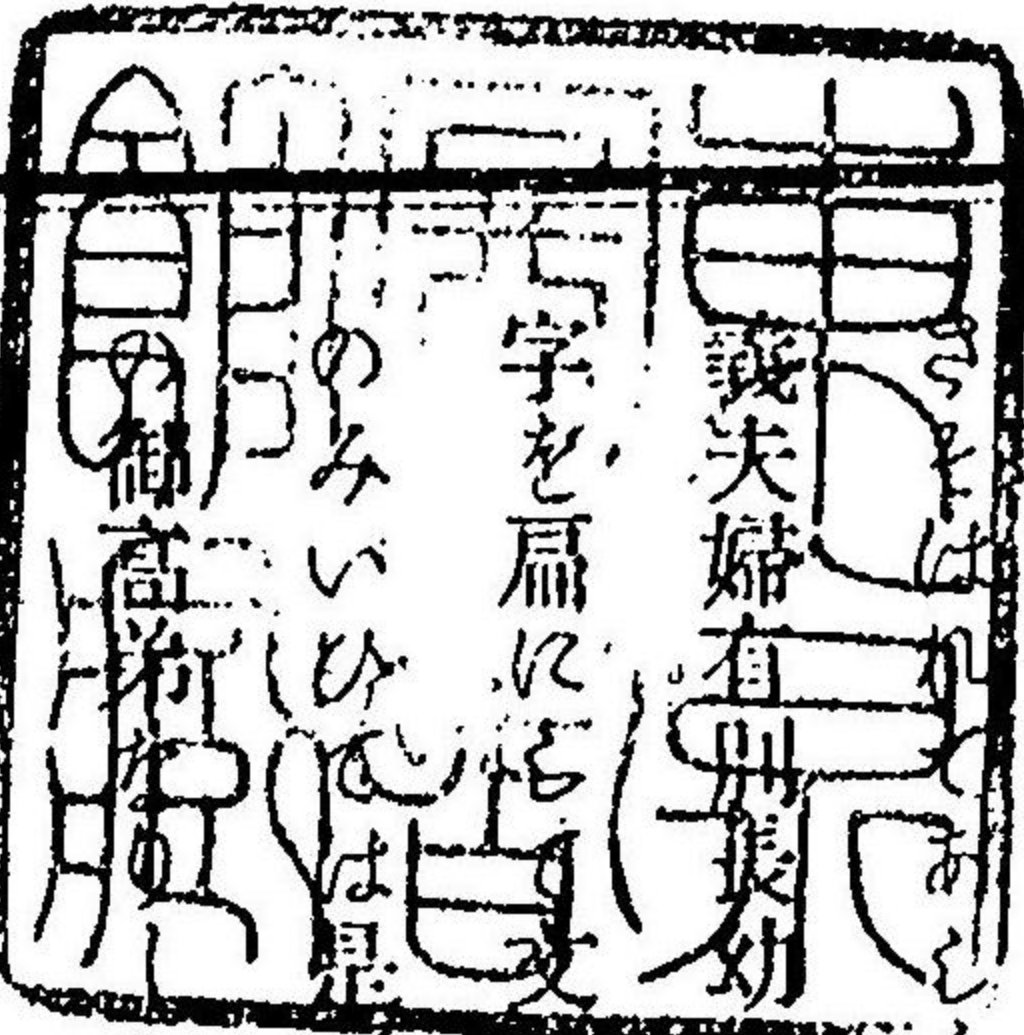
No 377/XXV

樂翁公  
口演

# 大學講義



大學といふは此書の名にて古一へ三代とて夏と殷と周との世に學問所ありて村々里々あるを小學校といひ天子の都にあるを大學校と云其學問所にて教る書物ゆへに大學と名付たるなり凡そ人たるものみな天地の正しき氣をうけて生れしものゆへ其性善なれともあらしまならはしむをみ友に



義夫婦有別長幼有序朋友有信の五つを教てほんの人はいたき事あり夫ゆへに教ると云字は孝と云字を扁にむすといふ字を作りたりたり孝の百行の本とてみな天よりもちて生るれどもたゞ孝とのみいひては是を孝と思ひても大に孝の道にたぐふ事ありむかし曾子は孔子乃御弟子にて由一番の補高弟なりかどもはあめ父に仕へたる時父怒りに乗して杖にてうちし曾子の思はるゝに父の老たるゆへはしりさけなば父の逐ふ時足をも勞すといふものよと心得て其儘うたれしかはついでこれ切死しぬ暫してよみかへりて後孔子の處へ行れしに孔子門を閉て不孝者をい是へは入れまゝとて叱り玉ひしとなり古一へより大杖はさけ小杖はさけむとて死に至らぬはどならはうたして父乃怒りを散するも孝なれや大杖にてうたるゝ時ゆゑ死したらば第一父に子せころすの悪名を得させかつ又その世繼をたつといふものにて不孝乃甚しき事なり曾子すら孝と思はれても聖人の



規矩にてみれば不孝に至る事故夫を教てそ乃過不及として過ぎも不足もなき様に仕たつるが如くなり孝は質として天より受得しち地なりそれに文を加へてその孝を誠の道筋に叶ふ様にするが教ありかるが如くへに孝に文をくわへて教と云ふ字になる事なり扱又大學校に教る書物の名故に濁りてたいとよむなりさて大學の書は初學入徳門といふなりと云ふ聖人の學に志ざして學ぶものを初學といふ徳は得なりと云て手まへものになる事なり弓術杯ではと不斷は様子おかしき人も得手の弓をとればおとこぶりも違ふ様なるもの其外常に鈍なるものよても得手の事にかゝれば相應にみゆる様なるものにて徳は常につゝむ處乃もの手前ものになりたる事なり夫と徳といへい生れつきなり中々學んでい參らぬもの徳乃ある人の仕合といへと左様なるものにてはなす常々言葉と行ひと一事になる様にいふと父に孝君に忠其筋よく行なへい自然を人も貴ひてあの男の申事故誠と云ふ様に信する平生の修行によりてつゝみの處が手まへのものになりいへなり詞をい尤至極の事をいひても常が左様に參らぬとあれが口のきけと手まへのものにさかふ事ではとい見くびる様になれば采配もさかぬと云ものなり何でも身をもつて教るでなければい參らぬ事なり自分の寐て居て人に起よといひても人のさかぬも乃なり佛寺の建立をするても困窮乃われさへ建立に助力するもへ御自分もいあんりふの人数に入候様にと申せばさすが岩木ならぬ人のへけいもといふを夫とわいは此建立の助力とせねとも貴様のつかれといへい自分のつかせに人をす

いめるといふ氣があるもの故加ふる者一人をいふ是自分からしていせぬは萬づ行ぬ事なり扱人君たるものい封内の士民億萬の人にみえ氣のかゝりい事ゆへその人君常の修行ありければ封内平らかなる様がなくその氣のかゝる証據の人君仁と好めばみな下のもの仁と好み悪をよろこべば皆悪しくなり女を好み酒を樂いめばみなその風義なる事なりそのあらし千人の供やつれて主人其まへにてあるべい其供の者みなおそろく其通りに人主の氣のかゝりい事故人君常乃修行よくて誠に奥向もおたやかに夫れより家中をねよを町在へおしうつり行事なる事ゆへ徳の一字が天下國家の平治の本といふ事にて至て大切なる事なり古への軍にのぞみても見くづれ聞くづれといひて鳥の羽音と敵の聲と思ひて敗走するといふも主人の心うとくに付萬人の士卒の心もういゝと成行ゆへよかゝる敗走も出來るといふものなり誠し舜の無爲よして衣裳をたれ手を拱きてゐたまへい天下の人はとあふぐ事日月の如くまたひ奉る事父母の如く彼の過る處のもの化し存する處のものい神と云ふ所よして身の歷るところ變化をなして改まる事ろくろゆかけて陶づくりするが如く土も覺へずしてそ乃形ちをなすそれ神の感應する誠し無形なれと神前へ至りて拜すれば自然と忝なさよ涙こぼるゝと云ふよ至るなり其無形の神にさへかくの如く況や聖王明主篤恭の至り神の如くして上よ現在まゝますに天下の人のいかで感應の効なかるべきこれその徳の大なる處なりいかゝ回紇といふをひす唐を攻め郭子儀一人馬にてかけ出して誓ひければ其誓を信じて軍



と解く其外は邪といふ國の主魯君の誓を信せずして子路の一言を信したるこれその時よ信せとるは常に信の實うち全きゆへなり扱門といふは入徳乃入口にして人れ家へ至るも門よりいれと道に迷はせりて奥の住居へも至らるゝなり其如くその入口正しければ其徳の成就するに近しと云ふへい田より來るも畔よくるもひとつ同理といふ様にて其道至てはよく又は嶮岨よてやうく危きも免れて幸に至りつきてその門より入る乃安を全死にはおかせ危きことのきて至るといへど小徑なれば道にも迷ひて多くの至り達せぬものなり聖人の學乃門を尋て入れば至る事ならざればそれの大學をすて、聖人の道にゆるへき門はなしくよく心をひめて此書をみるべし扱又學といふもの書とをむとて去ふにあらす世事を経るもみな學よして書にむかふのみといふにあらすされども孔子のときも詩とよまさればいふ事なく禮と多らされればたつ事なく又詩を學ばざれば面に牆するが如し事へのぞみてわづらはしといひ子夏も仕て優なれば則學ふといふ是みな書をとむ事なり聖人此時すらくの如し況や今聖人をやる事とはくして邪説と云つて聖學にあらざる説ども糸のみたれたる如く木の葉のちるが如くいへれば此時書とよませりていかにか聖人の道を得んあるよいまできのもの忠といひ孝といひ仁といひ義といふもあつたる事なればわれらがよときものゝなす事にあらすとこれ自棄と云てみづから我身をすつるなり忠孝とを知りざりといへどいかにか誠の忠孝の道をあらんむの

大猷院様御鷹野に御出のせつ六ツ時に御

成と御ふれありて扱御膳上りしなかばにても御約束の時刻に至れば御せんをなかば上りて御出遊はされしとなり夫をかくての御養生にあしうらんをて御膳中よは其時刻を延して御あゝろよく御膳を御上り被成候後に申上んと云へ者ありしを故掃部頭直孝大に叱りて將軍たるもの一日めいの上らすとも信の一時も失ひ玉ふべからざとて御膳中にも時刻きたれば其と申上たりとぞ是其御養生といひ口の腹を養ふ忠にして信をうしなひ玉のぬ様にとあたるの眞の忠なりその忠と不忠と孝と不孝とのとある髪の一筋ほどの事にて大に違ふ事を中々學問もせざるものゝするべき様いなり耳の五聲を聞もの目の五色をみるもの口の五味とあるものといへど耳を守れども五聲の眞はしれぬ目を守れども五色の眞はしれぬ口を守れども五味の眞はしれず耳にて其聲をきけばおめて五聲をしり目にて五色をみればおめて五色をしり口にて五味をあぢいへははしめて五味をしるいかにといふよ色にあさまと深きとあを聲に高きとひきとあり味にこきとすすきとあり其眞に至りて知らぬいれぬものなり子乃かひぬきを孫のかひぬきも子もち孫をもたねは誠の情とばあらぬなりそれの書とをむその事にも心を用ひしうていかにその道とるへき扱その事と経るといへど心を用ひさればさし事も耳に保さむ向ひ居ても見へぬくへども味とらぬ物なり人一日に三度つゝ食をくへども心を用ひてくはざるゆへめくふ上手といふものゝなき様なるを此なりそ此外の藝術日よ三度づゝ學ひて一生かくの如くならは是非其術も上手に至るへし心と



用ると用ひぬはかく迄に違ふ事ゆへ書とよむとて一日にいくらよみて心を用ひぬはやくに  
せその事をへても心を用ひぬは行れ爲にもならぬとありそれ學問の暗夜のとも火の様なる  
ものなりともいひなければ一步も行事のならぬとされども常は通ひ馴る道はともいひあつて行へ  
といへとそ乃道すがらおどろくまじき驚きおそるまどきはおそれつづくまじきにつまづき  
おろふまどきにころびたをれて怪我するもの多し又幸とたどりながら行て怪我せぬ難のなき道  
ゆへなり萬一難は河ふか又の今朝をみざる所に木石の類あるか又は水のたまりあるかといへ  
必せつまづき又水へはまるべしせすればやみ夜に燈火をたぎ行く事の一足もならぬといふものな  
り人一生學のされのさの如く常になれ日用の事ゆへ常にのさふりあふかまづ難をなき様なれと  
も一日少し乃變にあひたるとき扱さしつかへて常の半の口さへきく事あらず手足もそのの  
用にはたせおとろくまどきにおどろき恐るまどきにおそれつるに事によれば一生をいかれぬ  
恥をかふむり人前へ出る事さへならぬまどきの身をたをれ其家どうなる類みな暗夜にとも火な  
き故なり一生難なくかゝくりく行てやぎく一生わさるは幸といふものよて全死事よていなき  
事なりそれいしらせりて學問するにたらぬといふ何事や人君より下つた至て輕きものに  
も家をさけなく身なきのなり家の則父母のたまもの身の則父母のかたみなりその身と家ともちて  
も何心なくうかくとくらして醉生夢死といひて夢でくら夢で死ぬといかなる事よやあらんを

の學問してまなぶをあるも何ぞむつりき事か又は我身よめたぬ事を新たよつくる事ならはなる  
ほどあがたきも尤なれども後の明德にもいふて人は天地の正をうけて生るものゆへその性善  
にしてわが心の靈妙不測なる事は聖人とても我とても加はる事はなしその生れまををかへす事  
計ありよく思ひてみるへ今病有て諸醫手をつくしても誠に必死の病とみゆる病人とひとりの醫  
者奇術をもつてそ乃病平愈せしまことに命の親といひて此字へもあく悦び一生われが恩をわすれ  
せ贈ものをも厚くしてこれを謝すべし詩にもおれに投するに木瓜をもつてすればこれにむくゆる  
に瓊瑤と以てすといひて天下の事この恩あればこの報ある道理よて人も金を借るれば利息を付て  
恩を報するやいふをくわづか一品と人よりおくれれば禮報なければ謝して其恩を報する事なり扱  
はしめいひ疾をなすを大恩といふも身があればおそ病といふもいゆるといふ事もあるなりそ乃  
恩をむろこふもその恩を穿くるといふ身があるゆへなり今其身のあるによりて其衣と着食とくひ  
そのほか家をさもちそ乃職をつとむるにあらすや身はそれがつくりてくれしと考ふへ父母の  
るによりわが身ありわが身ありたりとてその人となるまでの恩のいかほどぞや懐胎十月のくる  
みとりてその子を産に至り貧ければ我着物をぬぎてこれをさせ器財道具を穿りて薬を買求めて  
何とぞ丈夫にそぞつ様に足の及ふところはゆのみをかけて佛神に詣て手の及ぶたけの醫者の功  
者なるものを招き得たき薬をかひてのませ金をかり着ものどうりてそぞてあくるときまづ三歳



までも常にふどころにいたき大小便の時を考へて夜中も起てうかひなげは泣としてその様子を察してやらない寐れはいぬるとして其様子をあんまことに日夜あゝろと子よゆさねてそごてあけ外に出て麗さまの嘗さとのぞみるにつけてもわが子の土産になさん事をおもひておれを懐よしてかへるわづかの疾ありても帯もとかせ髪もぬきよつきて介抱し五六歳も及べはその樂しみて遊ぶ事よつきて怪我なせん事を心づかひして世話それどもわづかの小兒のときは中々父母のいふ事をきかせまよひの口をたへし心に逆ひ戻れどもいさゝか實心より怒る事もなくたゞかひぬきのあまりに氣をもみて叱りたゞけども憎きにあらざりて成長すれば男の藝術稽古の世話とて女にぬい仕事をおへ借金とて嫁入とさせ何とぞ父母をばうつけといふともわが子をは利口といへかゝと只よかひぬきの心のみを育てあけし其恩とは恩とせ若き氣にはやりてさまよよからぬ遊ひに心をよのかし父母の金をぬすみ又目顔と忍んでたうらくの友による父母あれぞみるべきよよかひぬきおもひて何卒人のあらぬうちにと人になれかゝと日夜心をくらしめ夜更に歸りの遅きときは父母ともにいねきと勤當する期に至らぬ様にと父母たがひに雨筆となりて意見す然れども露こゝろに置しどもおもはせぬ事といふぞと思ふ心底なれどもまた憎しとは思ひぬは父母の心なりさはささうし至らぬ凡人をみの若きものなれば世に君子賢人の様にもひて人の譽ん事とのみまつも父母の心なりこれ人たるもひは人の子てなきいなしこの身

の生る大恩をだてやうなるゝ大恩教へ導るゝ大恩はまことに海よりもふかく山よりも高きかでその恩を報し得んそれゆへ孝子は終身の憂ひありといふよのあらざりその恩を報する事はあらざるとせめて身を生して玉はぞし事ならん心をやひり身に相應する人にならぬは何一言申わけもなれ事なり堯舜湯武もやはりこの身はかわらざりと成長しての心は賢愚善惡のたがひあるのみなわがなす事なり況や父母の家をつぐの勿論二男よりは外へ養子に行き女子の外へ嫁いりすを困窮貧苦れぢちよりやうよと父母の恩にて一生の安堵をせしむる引のわが自由になる心をも構ひてはてし身をたをし又は不埒にして其家を亡し身を失ふもまゝあるぞかし今いふ凡人なみの人どのいふの聖賢乃書をよみせねば聖賢の道と知らん様もなくはぢめいひし暗夜とをい火なよまたさよとつよきあるきて祖父の陰徳によりて一生難しむるで終るなりこれも又父母の恩といふべしすすればその恩を報せざるとせめて心をも人にして身と心とつりあふはせにすればまたいふべしふも乃なり人のこゝろを人の心にするに至て易き事あれど易きいなさきとそれすら身の欲まひかれてつるに心とて鳥獸の様もあちて終るぞかし禮記にいふをぞく鸚鵡ものいへども飛鳥をいなれを狸々をく言へとも禽獸をいなれとありて人のとほりに物をいへば鳥にして人ではなく猿も人の通りに働けともけたものにして人でなくといふ人いふ人たる心あればこそ人と云ふなり鳥をとらぬ鷹といふ非鷹といひ人の禮に背ける人とは非人といふいま人の身なれども心はそ



の人たる所にあらざれば非人といふべし折角父母たるもの日夜の心勞かんなんして身體を人に  
 たるにわが一心にて非人になるとはそも如何いふべき歎くにもあまりある事にはあらざや扱今の  
 人かゝる事にいあゝるもどめ世人の五十年なりわづか五十年乃うちに苦勞くけんをして人おなら  
 ふとおもひて死ぬといかい損といふべし堯舜桀紂同く土となれば聖人悪人ともかける事いな  
 一と五十年のうち樂しみてくらすべしといふも乃もあれは是の沙汰のかぎりなりむか  
 大猷院様へ御側のもの申上るには人はたゞ五十年の壽に候間恐ながらあまそ御心身を御くるしめ  
 遊されまゝ存下奉り候御保養遊され候様にと申上しかば成ほど尤ながら人生五十年のみおかけ  
 れども五十年乃あやがいりほどか長からんと 上意有りしとぞまあとに明君の 上意有か  
 き事など申もあまりある事なり今五十年のみトかきうちならはしか様に苦勞かんなん辛苦をして  
 もたゞ五十年れうちありわづかのうちくるしみ苦勞をいひて日月あらんほどの何萬年の後ま  
 ども唾きじていやめられなば誠に我が身の上にとりての申さふ様もなく父母の名を汚し先祖に  
 も辱とあたふる事なり五十年わづかの内らくをするぜいへど長き悪名をのますひか計か悲しき  
 事あらざやそれに世俗乃もの人間五十年のうちめへとひひて我が心をも鳥獸の心となし家とたお  
 一身を失ひ父祖の名を汚し或は飲食色欲一命をうしなひてを乃五十年の壽をへ保とせしめて數千歳  
 へ悪名とのこすもの多しいかかるこゝろにやあらんなけはしき事なりとそれといふも人欲ひ

とつてその如く無分別になる事なり皆たいくといふ事の人欲なりといへる人あり面白き事な  
 りくひとい着たい仕たいよしたいの類みなわが欲よりおこる事なり人欲正心と害する事甚だし  
 くつゝいむへし飲食の欲もさる事なれども人の多な色欲の一ヶ條にて萬事みなむなしくなるもの  
 なりまづ三昧線と好むと酒とのむもよからぬ事をするはと色欲よりおこるあやなりたゞよき事  
 の色欲はほとる事なりさて此色欲といふものあゝろし根させば賢人君子といふほどのものいさ  
 もなけれども中人已下のみな本心をうしなふも乃なり今相對死をする男女みなおろかなるもの  
 みはなく常は人なみなれは色欲のおとし穴へ入ると明り障子の紙と蛇のつゝく如くかへるふ  
 せもうちわきれて人よとらへらるゝ如くなるなりその色欲といふものいさひ色欲のみなわが心  
 此算用づくより出たる事よてまあとよまぬかれがたきといふにはあらぬ私欲本心とおほふゆへ  
 にゆしきとありつゝそれをよしにする事ならぬに付まづ此くらゐし仕をくべしを自ら少しある  
 一と加へるよりして春のあたゝかになり秋の寒くなる様よ次第くゝと漸を逐て先へ行ゆへ我もそ  
 れを知らずはしめのことしとのみおもふうちふと心付の春が先へ行こしてかへらふ様もなくつる  
 に名を汚し身を失ふものぞろしその算用づくせいふの美とは美と見みにくきとは醜とみるは人情  
 にて聖賢もおなと事なり凡人もその通りなれをそれに算用が出来て先とくゝりおくよつきて無分  
 別も出来るなり今道路にて美女にあひたればとてさて美しき色なりとみるのみ道路といひ知らぬ



人なればさまで色情もおこらばほふればわするものなりこれ此とほりなれの本心なればもそれよ私心づくのりて算用におくもへつる色欲まぬかれがたしとおもふ様になる事なりみなそのまぬかれがたきと思ひつめたるは先にもいふ私心で算用を仕おくものゆへかくの如き事なり人欲と盡しなくして天理をて天より受し心と其まゝにおくところを此大學の道なり聖人につきまたがひて學びてさへ得がたきに今聖人と去る事遠き世にまなぶに學をするの次第とくと知りて學ばねばあはく大い道にさへ事なり次第といふの二階へ上るは子的一段めよりはむることくその一段くへてのほらねは上へのあがられぬ道理なり論語孟子といふ書はみな一時一事にをりて發する詞よりてその書勿論有がたさいふとかりなければもその事をとふもの一人てなく記しとめる人も一手でなきもへ淺きも深きもみな次第をおいせ初學乃もの、其道をたづね得る事かゝきことへ程子此大學を先にして論孟おれにつぐものたまひたるなり聖人のことばのまさりおとりあるにはあらぬ中庸と云書は聖人傳授極致の言として申せば印可のうへの書の事へ聖人をおくれば學ぶもの其極意を得る事易からぬ事へ程子の教めはに及ばざるなり大學を先にいさされは其綱目のところの次第をあらせしめて論孟の極意も忘れぬ事なりそのうへ論孟をまどへありて融貫とまよとにその意をもつらぬきをせしめてその至極のところを中庸であらねばならぬ事なり夫のへに書をよみて聖人の道をあるもの四書とまねばあらぬ四書とよむものも大學

を先にせさればならぬ事なり今の學ぶといふもの左様な事をあらぬ奇書をさがしてよみ人のあらぬとあるとめてみづから慢するぞか夫の古人己の爲にする學でなき事とるへ

明明德

明德といふ天より受得し徳にして是則仁義禮智の惣名といふものなり夫天地流行して萬物をそたて生ぜそのをぞて生ずるとあるものは陰陽五行なり右によりて理ありて氣あり氣有て形ちありといふなり天道といふの取も直さす理なり陰陽五行は氣といふものなりその氣あつて此萬物を生おそたつるもへこれ形ちあるといふ道理なり車といひ駕籠といひても車の理と駕籠の理はかたちのまへに定りてある事へその形ちをあらせしめても人とのせて人のかづくものといふ理によりて形ちをつくるれはいつにてもかまなり重荷をのせて人のひくものといふ理によりて形ちをつくるれは是非車になるなりこれくるまもかまも形ちのまへに理の定めあるもへなりこれ理あつて後に形ちありといふは此道理なりさて此理あつてよ乃氣ありよの氣乃何つまるによりてこのかたちをなす事へ人の生するもの理を天に得る事へ生れなぐらにして仁義禮智の性をそなへざる事なり是性善といひ明德といふところなり人は萬物の靈として萬物其理によりて生ずれ共を氣の何つまるところよていはく氣のきつまい最上のとあるを受けて生れしか人にして其氣は偏どてりたよる處を得しが萬物なりそれへ人は萬物の靈といふあれなりその物といふも氣の偏をうくるもへ鳥の如



き孝何れともその外は得る事なく鳩の如く礼あれともその外をいふとくになるはか  
 たよるとおろそえいへなりはあめいひいこく人此正氣を得しものへ偏なるをあらう人  
 の頭のまるき天にかたどり足の方なるの地にたどりて平正端直なれば道理とあて智識ある  
 なりその靈たる人心が鳥獸同様にて父祖の勿論天へ對しても申わけもなき事なり堯といひ舜を  
 いひても凡人は同一きの明德なりされどを理は一つなれ共うくるところ乃氣の正しきがうちにも  
 清むと濁るとのちかひのある事へおれによりてその氣ににりてを字けて人となれるの愚と生  
 ト清ると受るの智をいふややになるなり上智大賢のうまれ氣の清ると受て少くも明らかならぬ  
 事なりこれに及べぬものはその正氣の全きを得ぬ計をなく氣質とて生れ出のちに事にま  
 トはり物にまおはりて耳目鼻口の欲さそられ友にみちひかれて其徳とそこなふへにいよく  
 生れいときよりの智のおちる事あけていひつくがたし七情利害とてかたみとろこひ怒りおそ  
 れあとする情をりおれの手まへの勝手これの不勝手といふ私のとくとりて堯舜の受し氣もひや  
 つの氣なれども右によりて聖人と鳥けたものとのちかひは成行事なりされども本體とて受得し明  
 徳と少くもくらまされどもいひ塵にたれはれし鏡雲にさまたけられし月の如くにして影をうつ  
 らすかけもさぬ様は成行てもその塵その雲のひまあれば本體の明らかなるところ早速光り出る  
 やうし私欲にさゆられて曇り覆はれし本體の明德まおるになきが如き様になれども少くも時として

さとする事何れは明德月の雲より照るがごとくに光出る事あり歌にもたさいて、物にまされぬ朝の  
 間の心やもとの心なるらんとはいひ又雲晴てのち乃光とおもふあよもととり空に有明乃月みあ人  
 此もとのあゝろいしますかみ見が、いなをか曇りはつべき是みな明德のおほいれぬとあらうといへ  
 るなり此ゆへ古しへの聖人教とはこして小學といふ學問所を建られ町人百姓の子ども迄もみ  
 な此小學に入て五倫五常乃道と學ぶ事なりそのうへ又大學の道とたてこれを教るもへ其教いよ  
 くひろく其功もいよく大なる事なり扱その大學にておふる格物致知の條ありてその  
 物につきその事よりてその理を考へ其明德を明らかにするの下地をおへさつるなりそのあと  
 に又誠意正身修身の條あるのを乃物についてあるとあらうの明らかなる理についてあれをてまへ  
 の身よもとづさていよくその明らかになる様にいたす事なりトめに格物致知にてその理を明  
 らうし又末の條にてこれをわが身に明らかにするれば我天に受得し徳もいよく明らかになり  
 て私欲のわづらひもなく本體の全きを得るといふに至るなりはじめに私欲の爲におほれをさ  
 は賢人君子の差別もなき様なれとも既に學問の功によつて自ら明らかになるときに凡人のみ  
 づから明德とあきらかにする事ならざしてけがれ曇りて、もみづからそれらぬ様なるを  
 みては何とぞして是をすくひて人の人たる道をいらせ明德の存在するところをいらせさくおもふ  
 によりわがとづから明らかなるところと押及して家をとのへ國を治め天下と平とする事なり曾



子の仲尼の道は忠恕のみと云はれしも此ところあり

親民

程伊川の親の字を新のあやまりとみられし朱子も此義に隨ひて註をされたを親新音同とさ故古書に誤れる事多し書經金縢にも親逆の字と新逆に作り大學にハ新民と親民にあやまれりこれ古一へより傳寫のあやまれるなるべし扱又民といふハ已れに對するの稱とてすなはち家の父子兄弟と云もみま民なりまればあらたにするといふもみな我徳をあらたにして少少の懈怠もなく日をかさね月を重ねてあらたになれハ自然とその徳民に及びて民の明德もみな新たなるよりて國家天下もあらたなるといふに至る事なり

止於至善

至善ハ明新の極處とて何事ぞなすに由此至善の地にとまらねばならぬ事なり止るをいふハ敬なりと云ひて一心にそを極處に止て字をかざるといふなり此三ツのものと三綱領と云ふ明德を成さらかにせされハ民とあらたにする事ならぬ又至善に止るでなければ徳を明らかにする事も民を新たにする事もならぬなり由へに此三ツのものと一ツにしてハらくもとなれぬ道理なり

○序にもいふごとく十五才已上より此大學に入て學ぶ事なりみな唐にても天下中の人が十五已上大學へ入る事ぞなり天子乃太子及び御家老御中老をふくらるの人の嫡子方及び天下中の萬

人千人にも秀を一人がらと見立て此學問所へ入れて學ばせる事なり凡學問所は人材を生しそつる爲に設けしりこれをたとふるに釜に入れてはるをよろの米ハ國中の民にして釜ハ百官とて諸役人なり水を入れて潤し火をもつて煮るは夫と教化するといふものなりその釜底もふちを全たければ自然ととくにへれども或ハひとけ又ハそあねては水ももり米もにへせ役人全く揃はねハ國天下も治まらぬが如しその釜を鑄る鑪の役ハ此學問所なり學問所の風をもつて人ぞこらへたてよき役人多くするといふものゆへ學問所と古より設置事なり

○三綱領をくわしくとかんし先明德と天に受る事はハトめよといひ一如くなり則孟子のいふ性善これなり天の正理と受る人の性が善でなからふやうのなき事なり詩も秉彜といふは性善の事といへるなりそれに荀子の性惡といひ楊雄の善惡をトるをいひ韓退之の性ハ上中下の三ツあるといへるのみ無理の事なり性惡といふわけは人の坐するより寝るがすき氣のつまるよりつまらぬがすれといふとみれば悪なりといへばそれは情に取ていへる事にして性とハ言がたし退之の上中下は氣稟のうへにて云さる事なり尤桀紂といへる如く悪なるも有ぞありされどもこれハ變といふものにて正とは云かたし目の二ツ鼻の一ツ口乃一ツあるが人の正なれども中には目一ツも生るゝ人もあり手の指の六本あるも有ぞかゝそれをみて人は目も二ツにかぎらば指は五本にかぎらぬものといひひがたし草木は青といふハ正論なり楓の芽たりのあかきと檜の木芽出りの白きをもつて



草木の青きにとゞまらぬと云様なるものにて變をもつて正せうたぐふなり孟子にいふ如く人の性に仁義禮智の四ツの備はるわけの今みとり子の道ありきて井の中へ入らんとするをみればやれこれとはとるものをも打捨てはしりよりつゝ抱きとむるは人情なりその留るときのあゝろいさゝろ仁者と人に云とれんといふ心もなくまたその子の親にもく思はれたといふ念慮もなく何かれぎにやれ危うきとはしりもるなりおれ物をあはれむ仁道のかさはしといふものなり義といふものは宜しきに決断する心が義なり至て愚なるものにて手前の主人にてもうたれ又のはづかめらるれば平生柔和の性得て一命をさし出してすくふ心あるぞか禮といふもみな人の心にあるゆへは不禮を人がおれば腹たつなり智といふても其通りよこれはとき事あはき事は自然とれるゆへ親のかたき打たると聞けば扱よき人トやとり親おろこのさたときけは憎みやつとあるれば非の心のある證據なりその外利害として手まへ勝手にかゝりてこれはとけれどもまづ是れ程にしてせけと思ひて苟且をかりせめに仕置し事の寐覺く心にすまぬものにていつまでを氣にかゝるがかり是れ心のうち此四つを全く生れゆへ親をみればうやまひ君をみればありがたく思ひ子や孫をみればかゝの心あるところへ親に慈とおへ子に孝をおへてその孝その慈みを過不及の中道へ行様に聖人の教へられ物ぞか虚靈不昧と朱注いへる人のあゝろの鏡の様なるものなりがゞみといふものゝ虚をむなく内に一物のなく靈として甚だ靈妙に少の

くらし事なき物のへ白き白く黒き黒きとうつるものあれば影さすやある間髪をいれぬその影さればやはり靈妙なる鏡の全體にかへるなり穢きものぞ寫せどもそのせればゆのかゞみどなる心もその様なるものにて美しきうつくしく醜きのみよく見へ扱字つるに隨ひてそ乃影に應おて窮らぬまおせに萬事に應ぜるといふいよなき心も一本乃虚靈にしてわかれて萬事に應ぜれどもまたあつまる所の一本に至るおれ神社に鏡を出すも右のところをいへることなりなり鬼神のその誠何にたとふべきをなく虚靈不測のとおろゆへ鏡に托してそ乃誠を顯す人のまゝろもそのかゞみをもちて人々を事ゆへそ乃神のまへに至りておれを拜されば兩方の誠相感おて他念なく神と人を一様なるとおろはこの處なり鏡をもつてをみせうつすが如くひとつ光に照通ひて一物なしこれ聖人のまあとてらさぬところなき様成ものなりされども凡人はその影をうつすのみなればとけれどもものに着すゆへそのもの去てもその影やいり心の鏡につきてはなれぬ右によりてそのかゞみも次第くくともりて後には影もさぬ様に成行事なり劍術の書をさし水月の場といふ事あり流にをりて色々にせけども敵は月にして我は水なりその水至て清く動かぬにつきて月さへさせばちきにうつる事おれを間に髪をいれぬ至清至静此心へうつ太刀は左右のわかるゝ様の事いさしてとき何くらき事なきまゝ自然とうつべきを思はぬとも打てるときころへの手も知らぬ心も求めぬと下る太刀まおとおともなくかゝなき太刀なれば萬勝を得る事必せり右乃た



とへに付て劍術の事をも申べし。まづ敵はかつよりわれにかつべし。われにあらぬうちの中々敵に  
いかたれぬものなりわれにかつは克己復禮の事なりわが私欲にかちつくせば敵にかつてもまけるも  
第一名利私欲の心がくらまぬゆへに獨立をして敵に心がなす敵は心なきにたれとあれ敵なしと  
いふとあらなりわれあるゆへに敵もあるにあらざや本體寂然とてかぬ場に何のまき間あつて敵  
する事がなるへき今炭火のいねるにいねるとあらざして最早目をふさぎてのちにいねしとあるぞ  
か。又道はてあるゆへにをころぶとあらざして両手をつれて顔をよけ目をふさぎて目をよけるにあ  
らざやそれは人の靈妙にして生れ得しとあるれば誠は右の如く心もあらざ身もあらざに  
りゆはせの出来るものなり。ケ様に私欲が出来て我があり敵がある様になるとその我にくつして全  
體のわざも出来ず智慧でこころへるわざもなるゆへ先でも智慧でこころへてこれぞうつし付勝負  
とよぎる事ならぬといふものなり。夫ほど靈妙の自然のわざへかへるにまづ我はかちつくさぬに  
ならぬ事なりあれも又此明德のとあるも同じ事なりわれあるゆへに虚靈不昧の心もくらみひて、萬  
事に應ずる事ならぬといふものなり。人は小天地とて天地の氣をうけて生れし人ゆへ人の身にも天  
地あるなり。天すぞに虚靈にして衆理をそなへますゆへ人もまたあかり  
氣稟といふの生れつきと云様なるものでおなす正し氣を受るにも淺深清濁れちがひあるよつき  
氣のみとかき人もわれの氣の長さ人もあるやうなるもの。智慧賢不肖もみな氣ひんぎいふものなり

その生れつき氣くせに抱はるゆへみな手まへ勝手の得手になるなり。人欲におおはるゝのそしめ云  
しとく七情利害に本心の明らか成も雲のおほふ様になる事なり。時ありて昏とてその利害のわた  
くしの心おほればその時は心もくをりくらくなる事なり。左様に時として心がおほはれても本體生  
れ得し明德のやはりその光のやます存するゆへに學者その發するところとして初めに云し仁義のは  
し。の事により時によりてちらりと動きみゆるにつきてそ乃どころをはなさずをなぞみかきて明  
徳の曇らぬや字に今日より明日又明後日といふ様に段々つとめ行てそのはしめ天より受得しと  
きの明德にかへる事なり。諸藝にてもその通に筆法さまくあれとも初め習ひく牛の角文字書  
し處へ至るを極所とする様なるものなり。人生れしとき無智の様なれども一點の私なき智のつくに  
随ひてあの勝手づくをふりほしきの字まきのととあるにつけ私も生ざるなり。聖人の有智の赤子の  
様なるを此なり

新民あらたむるとはすしびし衣を洗たくして別しあらたなる様とする事なり。革の字はつくりかは  
といふ字は毛のある皮の毛をさりたるをつくりかといふ同ト物にて別に成様になるがあらた  
むるなりす。まづは手まへの明德を明らかにしたれば凡その人みな利害の雲七情の塵は本心を  
おほはれしとをさけなく悲しくおもひてその明德をおして人及ぼしその人々をいままま垢  
つきたる衣の如くけがれをみし心の汚かをあらひしとく様にする事なり。あれ聖人の仁といふもの



にてひとりその身をすまするの獨善として我學の道になき事なりたとひ足をすりこぎにしてゐるまでも人の此やまひをさりて家もむつまじく人と安く國家天下安く平なるやうよと思ふが我學の道なりされどもはじめにいふごとくわが明德あきらかならざればまづその仁心をなくよ一名をあけたく功をなしたさに世話をして本心がくらさぬへやはり利欲にて人に譽られたいといふところの世話をへみなとけむ人も服せぬぞかゝむかゝより終せよくせざる君のみを名利の仁義故仁義なかりものにてわが心より出ざるゆへ人の心も服せぬ年より氣れたれ自然と名利の心よりも樂に一日もいたき心が強くなるゆへはたさぬなりたゞ明德よりして人よ及ぶぞおけねの根のなき木の如く源なき水の如く忽かれ忽つきぬべし仁といふはまの處なりあれわが徳も成就せざるに世をすくひたいとて一人くゞ講釋とて家々に講義をときたればとて天下を平にする事はならぬ事なり故に聖人家を出でて教を國になすといふて天よかはりてその人を擧用ひその役々に任しわれ又天命を授け天心を奉じてせればまことに寡妻ののりて家邦を御せといふごとくその家内よく榮へ扱町在におし及ぼすこれその仁の術をいふものなり至善にまるといふのその理の極所をとりてその一寸のびても一寸ちかみても聖人の道にたがふといふとよろに止りて外へはうつらぬ事なりこれ敬の心なり敬といふの學者の先務といひて先につとむべき事なり敬はむかゝとり色々にとき來れどもまづ心のむきを正しくして心の本をあらさむ身の番人となり事を目

付となる様にと室先生此云くを眞に敬の工夫を第一とすべし至善の事は是非かや否をいふ理の極所なり父母の孝をつくし君に忠をつくすといふ類學問して己の爲になすといふ様ある事ありその當然の理の々の明德ゆへ人よまたせしてあきらかにあるれども人欲におほはれて明德もくもる事ゆへ格物致知とて物事の理をさぐりて己の知をさめて事理乃是非の様といふとよろをありつくして止るべきところ止る事なり明德をあきらかになすも民をあらたになすもみなこれとてろに止りて外へ少くもうつらぬといふでなければいかぬ事なり人の天也天の人也といひて天人一様にある様になるが天理の極をつくすとといふものなり髮の毛一筋ほども人欲の私とてわが勝手の私欲なき様になるでなければならぬ事明德新民止至善の三つも此どころに至る事なり綱との綱の大つなの事をいふ領どの着物の糸りを云綱をあぐるに大つなを引く多く乃綱の目もみな隨ひてあがる衣を引さぐるよ襟をもては袖をもすともいふがふその様なるものよてあと乃八條目杯云ふも此三つの物が本あり此三つのものとても本の一ツなり此一ツをあぐれば綱の目の如く衣の袖すの如く八條目の類みを此一ツに隨ひてあがる道理あり至教は至約とて是程手みおろき事にして行なひみるとてもさまざまの事に心を勞する事にてはなき事ゆへ是非おあなはねばならぬ事なれども夫とさへ中々われらしきはならぬとは下めから云てかの鳥けどもものに一生なりて身を終るぞなけかしき事なり



扱又知止而后有定定而后能靜靜而后能安安而后能慮慮而后能得といふわけをとくべしすべて知るといふの心よの止るべき道と知る事にて知る乃みにてとくべしぬ事なりとへば弓は的に中るわざなれどもまどの有る事をしらぬはは下めより射る事をならぬといふとのなり人はこの理よりかたちある物にして人のこゝにとくまるべき地ぞこの事はあれが至善ぞこれは彼が至善ぞといふ様にこゝろよとくと知りて行わづかの道理もみな至善の場のなきはなりその道理の至善をいふは格物致知して物格知至る字へであければならぬ事なり扱その理を知りつくせば理定る事ありて私欲外物のわが心を動かす事なしとへに靜なり心その通りに動かさずして靜なれば居る處せして安からぬ事なりととへば凶年きんの地にをればをるに隨ひて人事をつくして心をそれに動かさずして天命をまつ事とへいづれの地いかなるめにあふてもあゝろの安からぬといふ事なり此なん義此かんなん此不自由に心の安からぬといふのみを私欲外物のわが心ぞうとて靜ならぬとへに安堵落つく事ならぬまさはおめれ如くわが心靜なればとるところみな安くやすければ從容閑暇とてわが心せわしなくこゝろのとりに事なく常にやすらかなる也へ事の到來するにつまみなわが本心の了簡もいづる也へ慮るとは云事なり

いま火事とてわが心私欲におははれしゆへそれ火事といふ命がおしく財寶がおしくその外の欲にからまされて心きたまらば靜ならぬ安からぬとてわが子と思ひて枕をいたれ枕と思ひてわが子と火の中へすつるの類多く有る事なりわが子とまくらと違ふくらぬ也へ心のうち了簡とあるべきなきとあるべし扱又平生は暗夜にては我が子の通るをば足音にておきはぶきにてを知らるは心の安く靜なるゆへなりそれはは暗夜にもおられる我子を白晝に枕とれもひて火へ投するといふはあゝろくらぬ也へ目もみへせ耳も聞へせしてかゝる事に成行事なりそのみなもとはたゞ私欲情欲に我心くらみてまづそのとくまるへき理とあらぬ故なり能慮して了簡も出来る様にたゞあれは事にあたげひ物によりてその理の深さ淺さをより目にもみへぬさざしをはかり人道の至善とあきらかにある故何事にもその了簡出來てははじめ知りえし至善の地に我身とてかと止る事を得るなりこれと得ずいふなり扱又后といふ字にいさゝかもなづむべからぬおれにては字といふものなり止る事とたに知り得ればあとの定るも靜なるも安きも慮るもみなあるよりして自然と出来る事なりそのちとと次第と立しにあらへて心をとくむべからぬ又知之の知といふのは下めにも云ふこととく引いるもの、的とてしり旅立つもの、行先の所てとてとく志定りむかふ事ある也へ立むかふものとはあれき一步ふみ出すも道とはなれぬ様にむかふところを知るなり扱又靜といふ心みたりに動かさずして外物私欲にうとかさされぬ事なりいま私欲外物にわが腹の内のさしぐ事は人にあらぬ也へわが心にもそれはさしぐ思はぬなり極寒に汗をかゝんとして火邊にとり衣をかさねても中々汗の出きたちさしぐ汗のいせきそれたゞ靜に坐してゐてもわが心にせつなきと思ふか又はこ



まり一事が又いはづらき事には汗出て衣をとほし顔をもあかめて極寒ををえらぬぞかゝれ我心の動くいよればは腹のうちのからくりの違ふ事なりその外手にて物どもち足地をふみ目物を見耳ものときゝ鼻ものときゝ常の事なりあかる内心おそろけいわげ持しものを穿ちすて或は足地をばなれてたどるゝにあらきやあれをたどへていはゞ屋根より飛おり椽側より飛おるゝ身にて下駄をふみかへせははつといふ心にてうちが動くゆへ下駄の齒三寸の高さより此六尺の身もたをるゝなりその外我私欲勝手にかゝりては目もみへき耳鼻も用いたゝぬものぞらゝ碁碁さのものを碁を穿つうちは人の云ふ事もあらざりて人にわらはるゝにあらきやみな私欲乃本心をうしなふ事よの通りなり劍術といへばそのとよりにて太刀をみれば目とふさぎて左右もあらざりてうたるゝものなり左とれをへは左に着ゝ右とおもへは右に着ゝてみなそのあとはぬけと成行事ありわが私欲にかたねは劍術つかいにもあらぬ理なり扱右に付て申べゝ武士は學問はあらずとよゝといへばも武士のわざにかゝりていはゞまづ戦陣に臨むにつけて云べゝ戦陣にのそむとき身のおさ命のおさゝに妻子のかはもさ石祿のおさゝ名のおけたさ人に譽られたさ此情欲方寸の心にみちゝてはさふゝて何のひまに一番槍も出来一はん乗も出来べきやわづかの劍術の稽古にさへはゝめいふ通りなるにやんの命がけの場にてあゝ私欲いよゝおあれゝ何のわざがなり何の理があれべきや然らば武士の戦陣のみのわざとみてはあゝの心定り靜に安く慮の四ツに至らば第一の武士の

業も出来まゝ況や武士の夫のみにあらざりて君に仕へて忠をつくり治には國をおさめて政事理にたがひを舉げ任せる人と失いなりせりて永く久しく天下を平にするが武士のわざなれば武士も武のみといふべからせよゝ武のみにしては此四ツが出来ぬ武さへならぬ事なり此四ツの出来るのみを我心明らるゝに至善とある一ツの事のみなりその理の至善とせざるゝ此學問とせざるゝ知り様なきと申べゝそれに武士は戦陣に臨む事なり戦陣に臨まばいまの様なる氣にてゝあるまゝ力もいでゝ命をもすつる氣に成べゝと岡評義でいへば戦陣に臨むゝかろき事ゝにあらざりわが身の得失君の存亡父祖への孝不孝のわかるゝところのおもきによもやたのみの岡評義にてゝほんの武士ならば安堵せざる事ならんそれをそふとも思ひぬ武士の如何あらんや先それとたへていはゞ弓を射るに引ゝめてよくとなせばあたるといふ事ゝ誰も知る事なり誰も知る事ならばたれもよくひさてとくはなつべきに心にはあれどもはやけありおそけありて十分保ちかたきとおもへばも耳とこさざりてはなれ十分かけひひてはなす氣なれといつまでもゝなす事のならぬはくせなりよく心にありてなんでもとく引てとなさんと思ひつめて卷藁よむかひて射るときは少ゝのよき様なれと目的のぞみては思慮分別を出あゝさぞわが心もあらざりつゝはあれるものあり弓の竹に糸を張ゝものなり思ふ通ふりに行べき事勿論なるにそれさへわが心とは別になるにあらざり又引事のならぬものかとおもへば素引するときは十分に出来るぞかゝればは易き事が最早的にれぞめば



ための思案と別になるなればいまだ岡評義にて安堵しても命がけの的にのぞまは如何あらんや覺束  
 なし多からばとく心の修行してわが私欲の爲に本心のくらまぬ様にするにあらねばかならず思案  
 の外の事出来てその恥をそぐ事もならぬ様よなるべし當世人が學問せせとよといへとい  
 ま一飯の食と喰ひ一重乃衣とさるも君恩なり妻子とやいな先祖の家をつぐも又君恩なりその君  
 恩父祖の恩にとくしたるにこの處の修行もせざるは第一人といはれまどき事なり人の君たるも  
 のも同然にして 江都の 御恩先祖の恩にてかく安く臥しあくまで喰ふ事なる事なりそれ  
 に此修行もせざるは人とい云れまお死なりと修行せしめて此ところをよくなすといはれわづか  
 弓劍術をさせてその私欲のくせにひかるゝとみるべしかくする事ならぬものなりわづかのわざ  
 にさへこの通りならば命がけの事なぞくになり工夫修行といふはたと外にいなし此三綱領乃三  
 ツにして三ツの一ツの理此みなりみる人よくあゝと考ふべしむかへ北條乃家臣に天徳寺何某とい  
 ふものあり毎度武功をあらはせし身なり或日いとあるまや琵琶法師とまねきて琵琶をひかせけ  
 るその郎等切ねとのものどもゝみな列して是をさく折しも天徳寺法師に向ひて凡そろこび樂しむ  
 事も興あるものながらあはれなるの理も切にきあはてそ乃感も又ふか願はくは哀れなるかたを  
 きゝたきよと乞はしによりて法師も諾しつゝかの奈須の與市宗高が扇の射たりし事をかたりけ  
 ればその曲もたいらざるに天徳寺雨傘とまきてひたもの紙をさ出して涙をおいぬぐひけりその曲  
 終りてのち扱々あはれなる事にて覺へて落涙いたしゆもひとつ哀れなる事をと好ければ今度は佐  
 々木の三郎高綱がうち川の先陳したりけるぞかたりけるにまれゆまへに同じく落涙數行に及べり  
 扱その平家も終りて法師もかへりければ天徳寺郎徒のとをがらうちむのひて扱々今の平家はあ  
 はれなる事にて待りき汝らは如何きゝとありしに郎徒みな口を揃へて面白き事に存したゞ一ツ  
 不審にそんしゆは君には哀れなる事と二度迄御好み有しにかの法師はあはれなる事とば語りゆに  
 ぞいと勇しきはなやかなる事とかたりゆひき夫に君にはひさもの落涙なせれゆいかなる事にて  
 ゆにや扱々合点參らぬ事にてゆと申せしかば天徳寺殊の外おどろかれて今まで汝らをは頼もしき  
 ものと思ひしに今の一言にて誠におどろき入たる事今よりは汝らをと見下しゆありひとへに  
 我家をおれざりと覺ゆるぞよくいづれも聞ゆへ源平その時の合戦はまことに安危存亡のわかるゝ  
 とおろよして志士みな死せきめ忠をつくそるときなりあかるところに平家より扇を出してあれ  
 を射よと好みしに源氏の武者のうち一人此扇を射るものなく誠は他方し笑をのますといふもの  
 にしてかつ又源氏の勢の屈するところなりそれとりて多くの武者のうち精兵を悉くされてえ  
 らひ出されしは此宗高なりあの時辭さんには軍の供をもはぶかるゝといふ事なれし志士此大事の  
 軍に中途にして歸りたらんはいかゞの恥辱にやあらんとおもひきりて馬を海中へ乗込しに折しも  
 風波つよくして平家の舟浮沈上下して扇もさたかにみわからざりしによりて心中に祈願して射け



るにあやまたせ扇の要ぎのを射きりて風にたゞよひてなみけうかべるさまの秋乃木は葉の風に隨ふ様に有りとぞ其時源平なりを静めてるさりとがまのやうとみて陸にはあびらとたゞき海にて舟はさをとゞきて感じ何へる聲あはは絶ざりといひたるにあらせやあの時與市辭して軍に何のぞ腹切て死ぬべし又扇と射て射損トなは又はらさりて死すべし進退あゝに至てきまるところにて哀れなるの至極なり扇の爲に腹きりて笑を後世にのこすの武士の身にとりて恥の字への恥なり又佐々木三郎が宇治川とあしたるもおなト事して頼朝公の秘藏せられし馬と友愛の蒲冠者にも賜はらせ寵臣の梶原に賜はらぬ名馬とあつた言葉の字へ高綱に賜はりしはあれて宇治川の先陣とせよとの命なり君命の重きいはんかたなきに重き賜ものを受たる身なれば是非先陣とせよし仕損トなはあれ又死にあんとの心なり凡そ人は死より外の重き事はなく悲しき事はいまさまゝに心を勞し利欲にひかるゝもみな命のたゞさゆへにあらせやその命と義によつて輕しとするは武士の習ひあれども武士の道とあはれなるものなすわれも陣にのぞみて堅きとくたさ強きととりひくにつけても陳頭に臨めはいつも宗高高綱のこゝろにて出るゆへ平家とさゝし時も思ひやりてあはれし思ひたりき妻子しひかれぬ人もなければ命をおしまぬ人もなしそれとおもひ捨て義によりて死ぬるは死にがたきものなりその死ぬるとき人に譽られん命名を何けんの子孫に功名をつとへんなどの心にて死なるゝものにていなさきのなりたゞ君恩は有難き臣の

道の重死によりて死ぬる心にてなければその欲とおもひ絶事はならぬものぞ汝らの戦功はそれにもよらぬ匹夫の勇にしてもと實情よりおこらぬゆへ死なぬ氣とみゆるなり扱く頼もくからせとて涙をおろせしに郎從むねとの人々も赤面して退きたりしとぞこれ武勇といふも眞實より起るにあらぬはならぬ事なりそれに戦陣にのぞむは面白さなきいふ眞勇にあらぬとよくあるべし仁義禮智かけては何事もならぬ義禮智も仁より外に出るにあらせとひとつにしてわかれて四つとなる事ありたゞへは四季の氣のおこなはるゝもとは天の仁より外に物なき秋は肅殺とて草木をからし冬の閉藏とて草木の氣を根にさせしむるゝやりの春に至りて發生の氣をおこなはんため也あれ生きてやまぬといふ道理也天の春は人の仁天の夏は人の禮天の秋は人の義天の冬は人の智にして夏秋冬の三つもくとは春の一ツにして義禮智の三つもくとは仁の一ツなり武の如き人を殺す道に仁より出る武でなければ眞武にあらせよく是にてするべき也天人一理なれば人として此道に背きぬれば必天罰を蒙むる事うたがひなき善人はさか悪人のおとろへ善人は命長く悪人はいのちあまにか善人は福を得悪人は禍を得是天道の照然とあきらかなるとある也いかにとなれば善人は善をなすゆへ人々貴み人々重んじてその役其任もその人に應じてあたふるゆへに必その録を得その名を得其職を得て必榮ふ悪人は是に反するにむりておとろへ亡ぶる也又善人善をなすゆへ人々貴み人々重んじてたゞみ人々をつくにつきてその困やくにあふても人あれど



すくひ身退きても人々是をあぐるゆへ常に榮りてその福も子孫に及ぶ悪人はこれに反するに  
りてさかゆせりて禍を得扱また善人善をなせゆへその命をば天にまかせて人事をつくすによりて  
常に心をくるしむ事なく仰て天にまかせ臥て人に恥ぬまゝ心のうちのびくとして屈する事なく  
私欲に心をくるしめせりてその生を養ふ事ゆへいのち長し悪人はこれに反するゆへいのち短し  
扱天の好み玉ふ事は仁と信あり善人その好み玉ふせるところをつくすゆへ天下の人みな是をよしとす  
人のよしとするところは天のよしとするところゆへ天必應護ありて禍をさりて福をあたへ玉ふ事  
うたがひなくかくの如き道理を邪智あるもの信せずしてこれをうたがへ共その邪智を以て天の  
實をさつる事決して無用の事也今よくいはるゝ人もわか死せるものもあり又一生涯憂にのみ  
沈みうも果て死ぬるものありあしき人にも一時の幸を得て死ぬるものもあり又いのち長きもあり世  
の人あれをみて天はあしき人にわざはひをあたへ玉ふといふといへどもみな偽りなりといへども  
れは大なるひが事なり悪人たとへ命長しといへども死ねれば悪名世にのこりて後人にいやめら  
るこれ天のにくみ玉ひて悪名を世にのこし玉ひて禍を子孫にあたへ玉ふ也又たとひ一時の幸を得  
るといへども子孫をのさいわひを保つものなく一代にて亡び又死して身あたゝかなるに早わざ  
はひおこりて小なれば石録大なれば國家を失ふもの也善人たとひ天すとも善名世にのこりていけ  
るがとありあれ天の好み玉ふて善名を世にのこし玉ひて福を子孫にあたへ玉ふ也一生患にのみづ

むものあれども是又人にあはれまれ人におろがられて死してのちも時あつて善名をうづもれぬもの  
ぞかゝ天の賞罰はかくの如く明白なれとも人の賞罰と違ひその罰あればそれ罰ありといふ様に速  
やかになきまゝ邪智の小人は當分天の罰の至らぬによりて天の罰をまなすとたもふに至る也いま  
養生するものは命長く不養生なるは早く死す勤のよきもの立身し不動なるものは立身せずとい  
ふは誰もしりたる事にてこれも又天の賞罰といふものなりされども不養生にしてよいのちながさ  
ものさまじくありとて養生せざともよしといふはれまゝ不動にして立身するものたまじく有あり  
とて勤めざともよしといはれまゝ悪人天の罰の至らぬうちに一生を終るものもたまじく有と  
て悪をしてよしといふ云れまゝそれ邪智の小人天をなきものにしてなに學者が天といふのとわ  
らへども天のれがけにてこの身の出來しをも字ちわすれて此天のしたにすむいかなる心にや  
らん室先生門弟子にいはれしにいま武士のわざなりとて武藝をすれども武藝よりは武運の稽古  
をしきたき事也武運のけいよは武藝師に習うべからず是は學者について習ふべしむかゝ長久手の  
合戦に森むさしの守は鬼といされし人なりしかとも出るとほをなく鉄炮に中りて死たるがうしこ  
れ武藝の稽古のみにて武運乃けいこなきゆへ也いかに武士の門々に武運長久の札をば張置てもそ  
の札のみにてその家のいつか亡しもあり又たれとろへたるも有ぞかゝ武運の稽古をなさず僧徒に  
頼見みて長久の札をばり置たるは何の役にたゝぬ事なりといはれし事雑話の字ちよありき面白



き事也武藝と云ふはわかきもの手とむなしくして居るためならひ得るは甚ど尤の事にて若き人の常くこの武藝は身をやつてならひ申べきの第一也されども武藝のみにて武運のけいこなけれは劍術のよけれども甲冑を着ざる人の如くそのわざをほごすうちよの矢石にうされて死ぬべき也何をか武運の稽古といふぞといへる事とよく考へてみるべしすて運天に在といふにいあらざや天の應護を得たらんに運のすかるべき様にあは其天の應護といいかしてうべきとおもひて天心を奉ざるに外になく天の仁にして信なるもの也人も又仁にして信なるものなれば持得し心にたしかへるのみの事也いかにして又もちかへし心にたしかへらんといは學問してその理をより定め静に安く慮りてその理を心に得て至善に止りわが明德をあきらかになす事也天の何をもちて仁にして信と好みたもふといひて天の日月星辰のめぐるたもとに數千載経ても一步も違ひず曆家にて百年の後百年の前の曆をつくるぞみてしるべしその外春つき夏來り寒暑時をたがへぬに信にあらざると云べからば扱天の萬物を生々してやまきはちめ云し如く肅殺閉藏の氣のおまなるも春の發生の氣の行るゝ初になればあそ天地の大徳を生といふといへるにあらざや天にあつて物と生ざるは人に在ては人を愛するなりあれを以てみれば天の仁を好みて不仁をにくみ信を好みて不信をにくみ玉ふをもしるべし扱その稽古といふはかりに仁と信とを行なひてその報を得べきにあらざや平生にも仁と信とをわかれぬ様にして常に仁を好みて人をそあなはせりにも人をあざむりせ況やおのれが心をもあざむかきかくして年月をつまはそその誠天よこたへて自然に天のおふこせうる事うたがひなきは是雜話にいへる心にして常くわするまどき事也はじめにひし武士は武道とて戰場のあとのみといはゝそれに仕をくと此武運のけいこなくは戰場へもいたる事出來まどあの天の應護といへる事を淺き様なる事なれども至てふかき事にて中々筆舌の及ぶとあろにあらざよく此道理をおまなひて年月をつまはそそのふかき事とおのづからしり得べし心とひそめてその理をあちははではないか其佳境にいたるべき益をなす河も流れの末はふかきや云はせやくれゝもこのところをわするまどき事也

扱又何事にも本があり末があり始があり終があるものなりその始と本は先にするとあろにして終と末とは後にする處也わが徳を明らかにせざればとても人に及ばず事はならぬ事へ明德は本にして新民は末也人のあの至善にとらねはならぬといふ事をしりて夫より修行せざれば至善止る事を得るといふ場はならぬ事へ知止り始にして能得が終りなり本は木の根の如く水の源の如くと枝葉のしけらん事とおもひて本根につちかひこやしして根をとりしけらねは末の枝葉のしける事はなき様なるもの也草木のたねをまくにも其地をよくならさねのよきたねにてもはへざる如くそ乃始をなせば終りの成就する道理也かれどもいま物をし立振舞の見事なるのみ晝夜修行し人にほめられ人におもんとられたさとのみ思ひても徳の本がなければたとひりつむに見えても



詰にかける人の如くにして何のせんもあさまの也うち徳がみちくしてくれば人も自然とおもん  
トてその名もあがるものなりその徳ある人なればいふ事も立振舞ひせんとうつくくして凡人  
と異なる様に成へし事也一かるよ木の徳をすて、末の髪かたち口跡立ふるまひにかゝるゆへ一生  
凡人となりておはる事なり口跡立ふる舞とよくしたさゆみな人に響られおもんドラれたさの事も  
へうちの徳に心つけは自然といづるこれ道に近しとときたるわけなり今やうの事みあ本をすて、  
末にはしり始をすて、終をもとむるゆへ柱のくち蔵にうの壁をうつくくつけたるが如く常は  
よき様なれを風に逢ては忽ちにくづれて終をどけおれ柱のくちには根つきこまひのやぶ  
れをはつくろひて扱後に土をつくれは始終全さゆへくづるゝの患なき今儉約と稱して金穀乃政  
と専一と一錢一粒も内へ入れて外へ出さぬ様にど心がけてそのけおめと本とをなさぬに付て人  
く心服せざる故その儉約をつとめぬまゝ無益の費のみにして其國家さくゆへ成事なき其人氣  
を直さんとしていさびしく罪一又いけんやくの制度を申付るといへども人氣の本始とするところ  
をむく故刑罰制度もいぢづらさやゝなりて其せんないかにとなぬいけんやくの下を厚くして國  
の本をつとくする事なりたくいへあるとあるも君の横費に備るにはあらまゝして國の凶年不時の物  
入を辨おて下のなんぎにならぬ様にする事也一かるゆへたくいへの米金の一錢一粒も君のゆのに  
ていなきおれの國家の米金也そのたくいへるといふい君の身を質素にして無益の費なき様にする

のみの事なり君質素をあのめは臣民を風のにおうつりて質素けんやくをつとむるゆへ君の身代  
よりして臣民の字へまでみなく困窮をまぬかるゝ様になり行の下のいよく厚くする事なり下  
の厚さの國の本の強さにして山の麓あるがごとくになるなりこの質素の風俗臣民のあゝるにみ  
こみて父子妻子饑渴かんなんをまぬかるゝによりてその君の恩澤にの衣服すべき事これ誠の儉約  
といふものにして君のみづから身をもつておしめる本と始あるゆへ臣民のあつくなるも國家の備  
へ全き末を終へ云いせして出来る事なり夫に儉約をて金銭をたくはふるのみを君の榮耀をせん  
の心よりれこり臣の録を減し民のとりかを強くして扱又榮耀の入箇を辨せんとするゆへ本も末を始  
も終もなきといふものにして一つとして理よ叶へる事にてなきまゝ臣民のこゝろをすゝなひて國  
家も亡び失ぬへいあかれい人君一心のやころが本にしてもとたれたての枝葉に及ぶの道に近きと  
あるべき也はおめにもいふ徳お本とすべきとつぎめせして軍にかさんとするの末を勤めわが心の  
修行の本たるをすて、劍術弓術などの人よかたんとするの末をつぎめ運の本とすべきをすて、藝  
の末とするをつとむる様にてはその事の成就せざるのみならず害を穿る事必せり今の主君さるも  
の家中の静ならん事を願へどもわが心の私欲にからまれて妄りよ動くせいらす家中の安からん事  
を願へどもわが心の事に處して安さををいふ事をあらま國家の静ならぬいわが徳のなきゆへ  
なりさるよその徳の本をすて、てたて工夫をゆつて國家をせりまづめんとすれどもせんなきのみ



ならずかへつて害を生ずはドめ云い智恵て工夫したるにせよもつて人に勝んとして人も亦智恵  
で工夫したるわざをもつておれをふせぐ力を以てするもおな事也これとふるに百斤をあぐ  
る力よて天下を得れば二百斤をあぐる力のその下にいをらせ千人よまされる智よて天下を得ても  
その智二千人よあゑしものいその下にはおらせさゞ徳あるものい人心の服するものい徳のまさ  
れるものい猶とくその下にゐて天下國家を平治する功をたすかくの如き筋なれざる事なるよ  
本とすべき徳をすて、末とすべき智力よて人を服せんとするのいかなる事よやあらんある大名が  
われよく書物をあのおんです、われも家中その風よならせしめざる食色の道よ風をなすと  
いへるものありきその大名の食色よこのむほは實情より書物よ好まば家中その書物の風になるべ  
けれども第一主人食色よこのみて人よ書物をこのめといふが風よなきぬ本といふべし子たるもの  
不孝にして父母慈をいと君たるもの不仁にして臣の忠をもとむる様にて本なきまゝ末成就をべ  
き期いなきといふべき也腎虚損して目を病むるあり脾虚損して目を病むるものもありその本をすて、  
いつも目の療治すれば愈へすまばらくその末をすて、その本をおぎなへん枝葉の目の自然治する  
の習ひにしてみな枝葉のよかゝるゆへその本いよくうちす 此間七八字  
切て見へす 枝葉のよからふ様ハな  
し山のふもと家の礎木の根木の源なればその本始を先にせざればならぬ事をあるべし

格物致知

是大學の次第といふ也これ三綱領の小割のケ條也格物致知誠意正心修身の明德をあきらめりよする  
事也齊家治國平天下の新民の事也格物致知の至善のあるところをいふ事をもとむる事誠意よま  
も平天下迄至善を得てこれよ止る事を求る事也明德よ天下よあきらかにするといふみづからをの  
れ乃明德を明らかよして夫をおし及ぼして民を治らたになし天下の人みなみづからの明德をあき  
らかにする様になればおのゝ其身よおさめをのゝ其親を親とし其長を長として行ゆへに天下  
の平かよならぬといふ事なしこれ學者の規模とておれを見あてする定木也され共天下の本の國に  
あるゆへ先その國をおさめぬに天下に及ぬ事也國の本の家にして家此本の身也身の本主の心  
にして心本然の正を得ぬの身もおさまらぬ事也扱その心の發するの意也私欲其うちをせめて善を  
なし悪をやむる事もあらひそゝぐ様にならぬに付て心それかために累はさるゝもよて正しくせ  
んとおもひてもならぬなりこゝろを正まふせんとならぬその意とて心乃決するとおろをさめ付て  
そ乃心はせの誠なる様にするにあらされのならぬ事也扱又智といふものい心の神明にして人ゝ  
なれいなきされどもある事も物欲におほわれ外物にわつらひさるゝゆへ是非善惡の眞のまろを  
とる事もならぬにつきよくその知る事よいたさぬの時あつてその知も曇りて善惡邪正もわからぬ  
様になれい意の誠なる様もなきといふもの也誠意よ此知よ本とする也致といふいいたし其いむ



る事也扱そ乃知をいたすの物にのたるをいふわけの人は知の心乃神明にして何くらからぬ物なれどもその理のあらさしくわしきとおもてと字らとかくれとあらはれと云様なる處の理まできはめつくさねはそれほどの字たがひあるに付て心の神のおほはるゝとある也その理を究めつくすは物につきて理を觀するにあり格るといふはおしきはめてその至極の理に至るをいふ也この八のものぞ八條目といふ條とは木の枝をいふ三綱領は本根なるゆへ夫より出来るものゆへ條といふ也目はあみの目をいふ三綱領があみのおほつなゆへそれに付しものゆへ目と云也

○知る事を極むるは物にいたるにありといふわけは知といふものは心の神明とてたとへば鏡の物をうつすが如く日月の光りの如くなるものといふ也もどあゝろは一身の神明にして知は又心の神明也その神明なるわけの美の美善の善惡の惡きたなきはしきのはしくその目にふれ耳にふるゝに隨ひて心に夫をあらぬ事あり又目にも見へる耳にも聞ぬ事にて心のうちにケ様と察するほどの靈妙なるの知也あれの人くみ天より受得し處のものを也されどもそのする事をすて、おけの私欲の靈外物の塵その神明の鏡を覆ふゆへに大山をうつせどもかけもさゝぬ様にくりまゝ子供をへらるゝとあるの善惡得失もさとらせしめて外物私欲のおどし穴へちち入る也あれのはしめにも云し事なれども常の利口めきし人も我がわたくしのあなへおち入れば東西もわか行せ上下もしれすして或の犬死をし又の出奔し何とせし者も多し常の利口も才はつともみな私欲

よおほはれて靈妙のかきみもくもりはてしめなり左様に成ての第一道をまら成行まゝ明德のあるをもしらる至善に止るべき地をもわきまへ成行也夫ゆへ大學校といふ學問所にてのはじめにあの知をいたしきひむる事をおしゆる事也そのいたしきひむるといふものについてその理を志する事也天下にありやあるものゝ理なきひなし見臺の見臺の理有り硯のすゝりの理有りその外草木鳥獸に至るまで理のあらざるといふ事なき我か知る所の理より段々についてれしきひめ行を物し至るといふ也天筋についていはし孝といひ忠といふのたれもあつたる事なれども子は何故し孝するにやその孝といふものゝその處その人によりてしかたあるしやとおしきひむべし外より養子し行しものも有り父母の年老しも有り父母のよからぬもあり父母の遊興奢侈を好むも有り酒食を悦ぶも有り又二男を愛して惣領を愛せざるもあり父母も養實の品あり同一父母にても父母の病氣のせつもあり朝起出るときもあり夜寝る時も有り又子の遊山に行き又は出會に出る時もあり一通りに云へばみあ孝の一事なれども品のさまゝある事にしてまづこゝに書し十が一つをあらわしぬさぎへん老父母のまへよての我年のよりしと云せしつても若き様にして氣のいたまぬ様になしよからぬ父母に何卒惡名の外へさこゝゑぬ様に思ひ付て氣長にそれとふせく様にすれども又あやけなく直諫もせよ自然と惡事れやむ様にと心掛るる類をるとき其人によりて乃孝もさまゝある事し孝といふもあつさりやの云べからせさて又忠といひても臣乃忠の志れたる様なれどもこ



れ又時より人よりて此忠もさま／＼ある事也君乃不仁なるも有り又君は仁なるも有り年若き君も有り老たる君もあをそ乃臣とても君邊つとむる役も有り又の政事の役もあり又の勝手の役もあり又の表役として政事勝手等もあづからぬも有り百姓おか／＼町にかゝり寺社よか／＼武事に／＼る等の役もありその時によりては治乱の差別は大なる事にして平生とても君の病氣のときもあり又君の外出のときも何りといふ様にさま／＼也おれ又その十の一ツをこゝにあらはす也まを仁君に仕へての仁の猶下へ行とゞきて國家の治をして堯舜の治も及ぶ様にと心おけ不仁の君にのまを命をさし出していさめて道による様にして何とぞ國家のみざれぬ様にと君邊つをむるの忠の君の美をあけ悪をかくして飲食其外の事も不爲の事の諫止するの類政事勝手もその職をつとむるか忠也又外様つとむるとて一日其録をひみてさへその恩を報せべに歴代譜代乃臣なれりたとひ外様つをむるとて政事勝手りらまどよといふべけれど何とぞ手に取て役をさしあふたる事のせましけれ共どもに國家の爲に寸志をたて、みづからよき風に成りてそれに外の役役も見習へんひをかに君の治をたすくるといふもの也其外これに順して知るべき也かく孝といひ忠といひてさへあけつく／＼がたきは事の事なれん孝も忠もありたる事也といふべからま其時によりその事につきその物によりてその理をきめつくせば自然とわが智もひらけてくるなりその智十の物一ツひとけぬひひらけぬところより私欲ひまに乘りてささる或人至て氣丈なるもの有りて夜

るねるとき天下にありきと思ひし事なく人のうなさる／＼も或の化物にあひ又の人におりてくる／＼むによりて聲をもあけてうなさる／＼もの也そのおはき事なくばうなされまどとおもひて手をむねにあて、寝しにその夢にらひ病やまのもの二十人は前後左右に取つきければそのきたなさを云んかたかくてつるうなされぬこれそのまをへる所より外物のわづらひをなすのみを其如くまた或人外に好むのわづらひなくたゞ殺生のみ色もまを酒にもふけらま一向に無欲といふ人也釣せし魚をまじつつけて澤邊をかへるとき狐その腰の魚をめがけて何とぞばりてとらんと思ひ女になりて出けれどもおの者右の人體をへ取あひを酒食など手づさへて見せけれどもとりあひを又いろ／＼れそろ／＼き形ちにかへてみせければこれまた氣丈なる人も故少くもかまひざり／＼かひ狐のまをとに智あるある獸にてこの人中／＼外のくせなきをへほかの物にていざまされきたゞ殺生の一ツのくせに見込てすぐに誠の狐になりていまの人のまへに出ければ竹杖にて打ころさんとして心のうごきたる時すぐに草の中へかくる／＼ふり／＼ければかの男逐て行いいつかその字／＼へ廻りて腰の魚を乃こらぬすみとりぬをぞこれ十のもの九ツその知のひらけても一ツのつくさぬとあられば外物のそのひまに入るは右の如く況や酒におほれ色にふけりて本心をう／＼なへはいと／＼私欲増長して本心をおほふ尤の事也夫をへ大學校にてはトめし教るに此物につきて知をいたしきとむる事と修行する事也その修行はまへにも云し如くすぐに知るところ



より身がきつくすとて孝といひ忠といふと知り一處よりその孝と忠をつくしきはむる様に今日も明日も今年も明年もといふごとくおしきはめてつくし至ればその修行至りて一旦に衆理をもつらぬきとせしめてはじめてとみやみと出し心になる也あれその心の全體すまもかけなくなりて誠の鏡よなるまゝそのかけをうつし形をみるにつけて明らかならぬ事なければ其知の至らぬといふ事なしといはれ本心に成る様なるもの也これと物格知至といふなり

誠意

それ善は天命の本然よりして人々うけゑし所也悪は物欲の生ずる所よりして人々私よりおこるもの也それ故に人たるものみな善にして生れつきての悪はなし善ある故に善を好み悪をばにくむは人のつねをする處也人のなんきを見てと救ひ度思ふは是自然にして生れ得し善心なりされどもよくはへとさし多くの金とにきり居てもその金のをしさよつきて十分すくひたくても一金一錢をも出さすされども人の難義とはすくふはよき事なりかし金をつかはせは甚おしくともはや少く私欲生ぜれどもすくひ度善心いまたほろひぬ故よとやかくと考へるほよいよくおしくいよくよくひ度がうへすくひて仁者といふ名が又ほしきに付てその金に利を付て人に貸すが如し始め難義の人とみてたしむこき事かなすくひ度と思ふが本然の善にしてわか金をせ心つきておしく成るが人欲也それにてやむべけれどもとかくすくふ心やせぬほと又人欲さかんになりてとやかく思ふうち

よき名を得て人にほめられんといふ心の生ずるのこれ又人欲といへどもよき事なりたし善心も少し交る事也そのよき名といふ處も又すてがたく工夫するほど金はほししをそれによりてよき名を得てわか勝手にもなりおしき金もへらぬ仕方といふほんの人欲になりきりて一番よき計と思ふて利足とつけて人に金をかせは金もへらぬ計でなくあへる道理にして人をすくひ人にほめられわか祈禱にもなれ最上のことと思ふ事かほん筋よりみればすくぬよりもおおとりたる事也人の思案工夫はみな如此になるうへまたかしてやるといふ恩の心を有り自慢の心もありて愚人はよきとのみ思ふ事也初めむとせきと思ふ心とつらぬきておしき金を忘れて金と打出してすくふは是誠の善心也孔子も出入無時と心の事をのたまし如くわづかの事にもちらと善心あらはるれいせやをばより私欲又生ず始のほとい善心を悪心とせおなしくらいしすしめどもまことやかく思ふうち右の悪心つはよき善心とせはふやうになる故よ此すくひたいせ思ふ初心の通るや字よするが簡要なりそれにはめられたきといふ念りよのおこるのよはや悪心をありの善事なれい本の事よあらせさすが人心故ども悪よもならず善の私情に不勝手故まぎ様よでもしてせけとそなかはせせりて利とつけて金をのすやうよ萬事みな初一念をせはさぬ故みづからの心にて心よきと思ふ場よいつとも至らぬ事也人のあろすのありしとあれとわか難義にせまれい金のほしき命のおしきにかへがしくは人のをよろしてその金を奪ふ心もつく也もされどもありき事と思ふ善心いまたほろひぬ故とやか



く思ふうちや悪心善心とればひなくすにつきて人せころして金を奪ふに至る也とてそれほとに  
 至らねの人せころすのありこれのせまき事也又わか難義もせつなり左程ならばその中をとり  
 て人せあるをすに人の物せぬすむかと思ふや字になるもありあれ悪とにくむありあれども  
 ほんにましくむにあらすといつゆ心に心よきと思ふやうにのなき事也扱又此初の一條の通り  
 にするの善也されどもそふにあらぬに付金をかしてやり又後の一條ころすいありされとも我  
 も難義に付たぬすみてあもふさておれにてよと思ひてもほととち日をたくるに付てぬさめ  
 くりに考へてみれその利足につまつてその人も難義一つめかの人もぬすまれてくるまわらめ  
 きてくからぬ事をあたりけりそのとき思ひきりて金をやりその時難義とてのきてぬすますの  
 いまこの通りにくやみはせま物ととりく善心の本なるもの故何かに付て思出君子といふ  
 くらいに氣のつまる人にあへはやその悪事かいつもむねに出て人か外の事をいひてもこの事か  
 と氣をいため手の筋人相せみせると免も前くの事なからも此事をいふやらんをおちつかせ一  
 生の氣さのりにあるあれありろとからせといふの事なり初るときは思ひきりて金をあたへ難  
 義をのきてぬすますにすませのときは不勝手のやうなれども何かに付てかんかへるほとさ  
 てきみのよき事としたりと人あらすわか心にありよよく思ひて佛神に對してわわり心よをとりな  
 く君子といふ人あらひても何のにつかき事をなく一生心のらくに思ふのあれ善心ある故也それ

めへに善を好むの好色をこのむとくすといひよきいろをみれこのむ心の誠もへこのむまきと  
 思ふほよあのましく人のためにこのむにもあらす名の爲にこのむにもあらす人にかくれこのひて  
 もよきいろをはこのむぞかこのよく善とあのみて行の善のならぬ事なき也悪とにくむの悪臭  
 とにくむがとくすといひてありきにはひにくむまと思ひてもいやに思ひて人のためにいやあ  
 るにもあらす實心よりいや故人よかくれ一のひてもそのありきにはひとさくるぞかこのよくに  
 悪をにくめは悪とするといふ事はなした悪はにくむ心あれども私欲の手前勝手に付てほんにに  
 くむ事ならぬ故とりけたもの、心に一生を終るなり人の善を悪とせぬは人の爲にするよあら  
 ぬ事故君子はひとりせつむといひて人のいらさるわか心のうちをつむむ事也大學の道に格  
 物致知にて善と悪とをよく明らかにして扱を乃意とて心の發する所をまをよする事也まをにする  
 といふの初めいひてよく人のために本書文字ありにもあらす善とあのみ人心のつね故そのつねをお  
 したて、私欲のまよりなく實心にはんにあのみやうに悪とにくむの人心のつね故そのつねの所  
 せおしたて、私欲のまよりなく實心にはんににくむやうに心にてわか心とあさむかす思ふ所  
 の初一念のほとりにするを意を誠にするといふ也意の心の動く處にして善悪の發するおありや  
 いふ也其善悪のわかれめと機といひてまよ本然の善か發すると私欲の悪か又入るはる事間に髪  
 といれを鉄砲の引かねの引は發し引ねは發せず引と引ぬとの間はこれ又間に髪をいれとといふ處



也善になれは天心に叫ひて福を得て身もさかへ人のからたに相應の人の心になる事也又悪になれ  
ん天心に叫はざりて禍を得身もほろひ人のかたちにしてとり獸の心になるまの通りに天と地ほざ  
のちかひもた、一心の發する處至てかまかに毛一筋ほとのかかひより出来る也一毛のあやまちは  
大山のまぢかひになるといふ處也それ故にその善その惡といへはさまくのいなるやうあれど  
もた、天理と人欲との二ツの外はな、この二ツの處を察して事、物、の道理を明らかにすればい  
よく、本心の善盛になり私欲の惡はみな盡るにとりて意を誠に、心を正くる地にも至らる、也  
た、人に善をせよ惡をまとのみいひては道筋明らかならぬ故出來ぬ事也善をな、惡をせぬも格  
物窮理して知の明らかなるが本也その物にいたりて理をきはむる本のまつ聖人賢人の書をよみ  
てその味をよく、りうればそのもろくの道理はいわせりて、れすすても、れる事に成へきな  
りされともその、るといふか我身ではこれか本心の、るとおもへともなら、よりて、るもあ  
り得手よよりて、るもありその本心の善心の知る外の知るのみな人欲の交りかある故也それと  
とへていわ、色とみるよよき色とよ、とあまき色をあまきをるの本心の、る也只あ、きせ  
りて居、色か當時の、やりの色よなれ、またわかあ、きとおもひ、いつ、かのやりの色となり  
て、さてもすてられぬといふ心よなる、なら、によりて、るにて、本心の、るにて、な、又武  
ほり、事がまきといふ得手が、人のあ、きといふ色を、る得手の心有る故その色をよ、と

おもふ、これ又本心の、るに、あらすして人欲交る故その、る處、あ、かふ也すへて人の心おな、  
き事故天下でよきといふ色、たれかみてもよ、とおもふあ、き色、その通り也、れ善を善とする  
ん天下の人皆おな、惡と悪とするも又然りた、人欲ま、る故風にならひ得手にか、りて、はらく  
善と惡と、惡と善とするやう、なるはな、か、き事にて、その本來の知といふにて、なきあり  
それ、へわか、るといふも本來か人欲かといふ處を、まへねは又わか、る事み、天理といひ  
、た、物に至り知る事と、い、むる知、本來の知を、むる事也すて、傳、い、ひ、如く小人とて  
行ひよろ、からぬ下司乃者とも、間居といひて、ひまにて、おらりと、て居る時、よからぬ事、あり  
、け、てりつて我心、てそれを制せず私欲のま、にする事故あ、きといふ、き事、せぬ事、  
なく、おて本然の善もなき様に、みる也、されども君子といひて行よろ、き人、出合、その、  
事をも、ひかく、てよき者のまねを、てうを、つき、ちら、手、ら、のよき事を、いひ、又、無言  
よなりて篤實のやうに見、るもの也、あれ、またよき事、よきといふを、りたる故也、さやう、惡、か  
くせ、目、のあ、さ、る人、の、先の人を、みる事、腹の、うち、と、すきと、ほすやうに、みるま、い、の様に  
、く、て、せ、ん、なき事、なり、中に善、あ、れ、あ、ら、い、さ、す、とも、外へ自然と善か、み、ぬ、れ、とも、中心不善の  
み、よ、て、外へ善、み、ぬ、るや、字、に、と、する、の、か、れ、事、乃、最上、也、それ、わけ、故、聖人、此、道を、ま、な、ひ、て、人  
人たる道、と、ら、んと、する、の、君子、の、人、ら、ぬ、わ、か、心、の、そ、こ、つ、、む、事、也、む、か、も、ろ、よ、にて、闇夜







字へもなきおろかなるものと自棄自暴といふ也今愚といふの才のたらぬものをいへとそれを魯鈍といひて學ひてさへ行いたるかに聖賢の地へも至らるゝ事也たゝ自棄といふのわが身に我身をすつるといふ事にして中々此方せもの出來事也と初よりいひてせぬものを云也自暴といふ賢聖の書もやくまたゝすと見ておれぬもせぬもの也此せぬといふにていとふもほんの人にならうや字かなき故このうへなき愚と孔子もの玉ひ一事也此自棄自暴の二ツより今いふおろかよてにおき方がるかよまさりたりとへ才智もそなはりて修行もよく聖賢の道と貴ふ刀にていわゝ正宗ともいふへき上作乃刀なり上作乃刀はきればよくきれつけのよくとほりせぬもせぬもせぬものなりさてにおれぬもまたへに至らぬ刀といふものよてりつはにのきれすよくのとほらぬてうては直にまがる身也又自棄自暴といふ人の刀にていわゝさえ過て打ぬはやくおれる刀也よさ刀のまかれをもまたゝさあゝほうのかかりよ成へ地かねもうつくしくさえて見へても打と直におれるの何れやくにもたゝせてなまぎたへなる刀よはるかにおとるへいまの世のおさかゝき人か何學問とてやくにはたゝぬもの也忠孝といふのれとゆそう出来るものよてはな理解くつ計よて用事にさらすとわつかの才よてりあうにいと打とおれる太刀のやうにて一向にやくまたゝすたゝ管の中より天を見て天と小さきといふかそくそのうへ學者のよからぬ行ひよて學問の無益のあの通りなりといへとその學者かあちくのそれをいまゝめにしてとく學ふへそ

のあゝき學者を見て學問をあゝといふの木をきる斧にて土をほりて見て斧のやくまたゝすとひ土をほる鋏よて木をきりてくのやくにたゝすといふよくにして外症の病に補藥をもてつるに補藥に功なりとゝ内症の病に瀉藥をもりてつるに瀉藥の功なりといふたくひ也ゝ私欲長て學問のよきといふのりならかもする事かゝりに思ひてよりくつなゝにせぬのさす人にあゝくいわれんと思ひてむりにかゝるやうな事をいひてそれにつけてせぬつも也よゝ劍術よもせよよくつかひても一體あゝき人などの強盜のわさの爲に劍をふるふへゝそれによりて劍術は悪さといふも同様なりたゝ人は手前勝手と專にする故酒をこのむものか内損の病人をみてゝ酒のあゝきといわぬめゝに食傷しても一生めゝのきらいのなき様なるものにておればやめてゝ勝手にならぬ事なれば也學問をして行ひよからぬ人をみてゝや學問にこりるといふのもとせまゝき心がある故也扱又わか一體おろか故中々學問のならぬといへと自分をおろかなりと自身によくわか分をけるならゝよろゝき人なれとゝゝぬゝやうこよは馬鹿といへゝ御尤といひわて腹をたてるゝわかおろかなるゝおらぬ故也その外立身とく思ふも重役をつめたがるもみなわか分をあらぬゝや字もわか分をあらぬをあらか故に學問のならぬといふのいひくさといふものよて實心左様は思ひぬ也その外いそゝきの又と年寄りのをいふも同様にてあれ又せまゝき心にてゝりりわりからと不相應のせりけたものゝ心かよゝと思ふやから也いそかゝさうちにもわかすく事



ひまのあれどいやそれよかゝるものにして當番よりかへりても善服をぬかせりてその好く道に  
 いかゝるぞかし年寄しやいへをこれをもす道にかゝりていつれも事をも修行する老人もある物ぞ  
 かし況や人の本心よなる學問の道なれば朝に道と死していつれに死して心かゝりの事なりといへ  
 るがそく生も死もわか自由にならぬ事よ、人と生れて人の心になるとりけたもの、心よなるど  
 のわか自由になる事也そのなる事よ、よくしてたゞ、生れし人の形そやおうの心になりて  
 天地父祖への申さけかるやうにならたへと明日死ぬともいさか思ひのおす事はなきはづ也さ  
 らの年寄たりもはや修行の年もなしといひて鳥獸の心よ一生をおひるとあころよを思ふいか  
 なる心にやあらん年寄たらは猶く死ぬも遠からずそのうち少くもはやく我心にて何ん心して  
 一生を終らんと思ひとまるへき事なりいわんやいそかしきの又いままさら學ぶものつかしきなど  
 いふは誠よいふよたらぬおろかなる事也我どりけたもの、心にて居るをいはずつかしとも思はずそ  
 のよき道とならふをいづるとはいかゞたる事よやいままとへていさんよ人と生れて手の指はを  
 りの指類し身にはけもの、毛のへ出さらん人まへに出るとはちて心をいためて死すへも、そ  
 れどなをす醫者ありときりの大金をいれて薬をもとめ遠き道をも何とも思ひてその醫の家に至る  
 へ、それの人まへよ出るぞもかまはずそれなをす醫られともいそかし故療治のうけま、又の  
 藥種代なれ故藥のもらふま、又のいも、やこれにて事すむとなりいまま年寄て療治をうくるよもあら

しといふ者の天下に一人もあるま、さなり身に、獸の毛のへ指の鳥類たりとも心たに鳥獸の  
 ぞくならずいさまていつる事もなるといへ、わり心みな鳥獸に類したる、表へ出せ人もみぬといふ  
 によりて何とも思ひぬ事にやさりといなけは、思ふへきよ、たちの少く鳥獸に類したるを  
 よも思ひぬ、此うへもなきさ、ろのさ、いふへ、その心の鳥獸なるをなほす醫の道の、此聖人の道の  
 外よ、いなり、それいそかし故學べ、年寄し、ゆへ學ばすと、いふ、尤の道理とや思  
 ふへ、さか、せりといわ、からぬ事也、扱又その鳥に類し、獸に類したる形、ちと、なほす、い、或の毛をぬき、又  
 の指をさり、すて、至、たへ、た、さ、あ、ら、き、療、治、を、も、せ、ん、に、そ、の、せ、つ、な、さ、を、も、こ、た、め、へ、それ、に、聖人  
 の道を學ぶものは學ぶほど心も安くなつて、成事にて何のせつなき事もなく、うけ、本來の心に立  
 かへる一條の事計なり、世の人の自暴自棄さりと、はせんか、た、な、き、事、なり、初に、い、ふ、そ、く、意、の、發、する、初  
 一愈の天理とを、ま、ま、人、欲、乃、ま、り、な、き、様、に、行、ひ、ゆ、け、は、德、は、身、を、潤、す、道、理、に、て、心、も、乃、ひ、と  
 いら、た、と、め、つ、た、り、と、して、人、も、彼、に、對、て、は、自然、と、敬、し、自然、と、た、れ、それ、自然、を、服、し、その、名、も、あ、か、り  
 その身を用ひられ、扱、天の福澤を蒙りて、この世の私欲に、つ、ま、鳥獸の心の人、も、す、く、ひ、上、る、や  
 う、よ、なら、ひ、扱、し、難、有、事、なる、へ、き、に、よ、き、とい、ふ、事、の、あ、り、な、ら、と、か、く、人、欲、に、か、つ、事、り、め、い、わ、く、に  
 思、ひ、て、と、ふ、も、今日、の、め、い、わ、く、也、明日、半、分、人、欲、と、改、め、明、後、日、又、半、分、人、欲、と、けん、し、次、第、を、逐、て、今、改、め  
 ん、を、み、つ、から、わ、か、私、に、用、捨、を、く、わ、へ、て、お、も、ふ、は、と、に、第一、改、め、や、う、と、思、ふ、日、より、人、欲、交、る、よ、付、仕、と



けぬ基といふへいたとへは至て短慮なるものが日くのやうに家來を手討するにみつゝらも少一さとりてケ様怒に乗じて人を殺すの至也これより相改めんされとも明日よりせんと改める事そのめいわや故今迄日々ころころさる處を一月一人つゝころして二三年のうちをやめさるへといふかこゝ今の人の悪をやむるもとんと如此ありきとらゝの悪臭をさくるをくにとんとやむへ善をなすをは好色や好むをほとんとなすへおれどか心にて心をあざむぬといふものよして意を誠にするといふなり

## 正心

凡そ人乃心といふも乃の靈妙不測にてかゝみの空一き如くてんひんの平らか成かこゝにてさて一身のうち的主人なりその鏡といふもの先より來るものあれち先又その影のうつる事間髪とされすその影されはゆとの空一きにてゝまるてんひんもそのとくにて常は平よして寸分のひつみな先よりの來てこれにかゝられは俯仰その輕重をなすとして先の重さかるさにてたかひてふしたりあせいたりしていさゝかの私なり其物されは又本の平よとゝまるその如くよして人心の虚靈なることの萬事の感するに隨て應ずる事間に髪をいれを聲にひゝきの應るか如しその感せざるの時に至虚至靜にてかゝみの空一くてんひんの平かなる如くまゝて鬼神といへとゆそのささゝをうかがふ事ならぬもの也と鏡の中に常にその形を設くれは先の形にさへられて影のうつ

らすてんひんを常よそのかるさおもさや先にきひめておけの先の輕重によりて應ずる事ならぬ人心もその如くにしてこの方より私情によりてその心のうちに一物ありての先に感應のならぬ事にしてその正一き節にあたらぬわけ也それ故に心正一からぬは身のおさまるへさや字なり其心正一くせんと思は、物いゝりわか知明らかになりてその心の發する意をわか本性のまゝにせされはならず故に誠意修身の間に正心の目をおきたるわけ也正といふ事のまんぞくにするといふ事也かたゝよらす過不及の中を心をおく事也それ故に心にいかる事あればその止を得ず心におそるゝ事ありてもその正を得ずきたのゝ事ありてもその正を得ずれへる心ありてもその正を得ずと傳にもある也あれ中庸にいふ喜怒哀樂のいまだ發せざる中といひ發してその節にあたるを和といふ意味なりそれをくゝいゝは、不患不恐不樂不怒をもてよゝとするには何らす此七情といふの人の是非あるへき情にしてこの情なければまた人よてもなりといふへき也此大學の傳に心いある事あれ心おそるゝ事あれといふ處にとく氣をつけてみるへく心のゆと至虚至靜にて空しき鏡のよく平なるてんひんの如くその空一く平なるときにいさゝかの物もなき道理にてわか心のうちにおそるゝ一物かなゝ一物いかる一物ありて鏡の中に形を設け置て外の影のさゝぬ如く心に其一物を已前に設け置ては萬事に應じてその正を得る事のならぬ道理也いかるへき事か感ずれに應じていかりおそるへき事が感ずれに應じておそるなれに發して節にあるもいひていか



るもおそろも天理自然にして本筋也故に和といひて天下の達道とはいふ也それを物の感せぬ前に一物のいかりがあれハ先の物め感ずる事なきまゝその應ずるも一物の應ずるにある故人欲しいたる也右とたとへていはく人のきけんよきとき腹の立さふなる事といひてゆさほと腹は立すかへつてきけんとき事有る也腹立時にさまての事といわすきけんに入へき事といひても猶ほそれに付て腹立つ事あるなり何もうつらぬ前の心の鏡のうちきけんよきときといふ一物あるゆへ腹の立へき事が来りてもそのかけがその一物よさへられてうつらぬ也腹立ときといふ一物ある故きけん入へき事が来りてもそのかけがそれ一物よさへられうつらぬ也萬事につきて皆そのこゝ君と他人がはつかゝめたりせいはく怒るへ君を他人が敬ひたるといはくよろおふへ親類の病をきかはされふべ君の叱りせ得たらはおそろるべしこれらは本然の筋にして是非かやうあるへき人道かりさるにわか心の字ちに一物のあれハその應ずる事道にあたらさる也世俗のせわに心をもまれてむやくやくと腹の立時に君御叱りあそたりせいはく恐るへきに腹の立一物かありて心か至虚至静ならぬ故そのいふ事をもろくに聞ずやかまゝさなといふやうなるあれ心にいかりの一物あれハそれ正と得ぬといふわけ也又わか私欲の願ひかなひて何をなく心のうちよろあふ一物あるときに親類の病を聞いてもその一物にさへられてそのいふ事をもろくにさかすそれハと計いふか又はおのよろおひあれはまたそれほとのおそき事ありうちなをいふ心もちになるもありこれ心によろ

こふ一物あれハその正と得ぬといふわけ也又わか心のうちに私欲の情につきてひさもの空おそろしくさよとくと思ふ矢先には只他人か君を敬ひたりときてそのいふ事をもろくに聞へす敬ひたりとてわか心の落つきにもならぬといふ心もちになるもありあれ心におそろる一物あれハその正を得ぬといふわけ也又我か心に何をよくと私情にひられて氣をつかひうれひかなむときま他人か君をはつかゝめたりといひてもそのいふ事をもろくに聞ず何かにつけてくらうなる事とやひり初の一物にからまざるゝもありこれ心に字れふる一物あれハその正と得ぬといふわけ也右故に心いかる事あれはといふ心の字をよく心得べ常人の情よしてそのいあるへき物來れハいかりてそのいかりの影いつ迄も心のかゝぬにつきていなれぬ故鏡の中は一物ありてかの空平といふ所にならぬまゝ外の物か来りてもその影さゝせしてやひりいかりの應ある故その正よきといふ道になさしや字おなり碁さうつとき人か名とよひてもその聲をきかぎ又やうくよひつゝへんおても心こゝに何らぬ故あとよていわすれてしまふ也是れとれハ存すつれハほろぶと孔子の玉ひく彼れ敬といふもあゝの放心とて心の存在せぬせとりとめておく事也右のそく心その虚明をうしなひて一身の主人たるへきもの出奔をてい何との目のやく耳のやく口のやくの家來ともせん方なく途方をうしなふ故わか身を修むるといふもわか心を存在するやうよそるが第一の工夫の入る事也その敬を修行するといひても第一のわか知の明らかならぬ事也その怒か感して怒り



喜ひか感て喜ぶてく心一點のくもりなければ本然の怒本然の喜の場にはいたらざる也さる故に凡人の情はいかるまゝきにひりおそるまゝきはおそれてみあ心の鏡くもり果て私欲にていかりおそる、故本筋に至られぬ也それ故に初に怒甚くてもあとにて考へみれいかるほどにはあらずとおもひ初めおそれてもあとにて考へれいおそるほせにあらすとおもふのみなわか心のくもり故發するものにて誠の本然乃性よりうまき出るにはあらざる也たとへは己か心の鳥獸なるをいはずべきとおもひおそりて形ちの醜とぞわか心よわつらひからせいつも嫌よきを喜ぶすしてわか形の美なるをよろこぶを以外我爲をぞ折角深切にいふまかする意見をい忝な一と思ふへれかへつてそれをいかるなと皆人欲より發する喜怒故節にあらぬのせ也此節といふ竹の節より出ち文字にて宜き處へちやうとあたるを節にあたるとはいふあり扱序ながら此意見いふ事といふへ一凡そ友同志いふも先のあしき事はいひかたき習なるに君臣と位して天地のくぐえ故た、出て時候一通り乃事いひかたき處にその君のあしき事といふと思ふの大抵なるせつなき事にていなれ也人としては私欲よあたる事といへはらと立とれ故眼前君乃はらとつとせりても己か身といふ事露計をなくた君の字へ大切とのみ存込て手討にゆわんも追拂されんも蟄居されんも妻子といなれんも先祖よりの石録をうなわんもいとわぬといふは誠の忠臣にして

東照宮もかねて諫の一番やりよりもかた一と仰られ一處也と忠臣の身ある事よりを君有る

事よりわか命ある事をあらす國ある事のみをて君のあしき事をみればたなけかひく思ひて晝夜それのみ心にちへすかなく思ふ扱一身とすて、諫言申上んを決定して心のうちよそのいふ事なと一々らべ工夫しても十ヶ條の諫むる事いさんくへりて九ツ八ツを又その諫むる日になりていらべみれ九ツ八ツを半のけんしてさ、君の御用ひあるやうにぞねんしきとうてのち君前へ出れり君威の照す事日光の如く臣の屈する事雪霜のさゆる如くなれ九ツ八ツの半たりとも申つくりたたくことばも行とぞかき理も盡りたきほとよある事也さるを君たるもの己か威を屈し顔を和らけむねをひらきて其いふ心をよく賞美すへき事なるにさなくして臣として君をいさむるの不屈至極といふ心からいひをあなひやおせりてむりに其忠言をいひけしをれよりもあしき手討のし又の閉門蟄居させてその言路の閉るやうにとそるが多き也臣としていひにくた事身命を捨ていふたれが爲をやみな君の爲也一からのいふ事よりや用ゆるにたらすものこととよ失禮の筋ありたりとも用捨て其忠を賞すへきに私欲に叶はぬ事ゆへいかる心よなる也おれ君の心靜慮なれいよけれとも私欲の一物心に存在する故いかるまゝきにいかるこけ也たなけか多き諫言いふ者と左様よ退をれいよく忠臣遠さかりてへ辱らひの邪臣のみよなりて己か身もたさすらす家國も齊ひ治まらすして永く天下後世にさらひせのこすもの多し身を失ひ家國を亡すにかへつてわか私欲をなさんといふの本然の心のくらみせりみるへ一今囚人の今日首



を知らるゝ時にあゝの着物を着て髪ハケ様ゆひたきと望まきハ死ぬ身にてとらふハ一いま家國  
 乃亡ぶるぞも一らむに我私欲を行ふ事秦乃二世隋煬帝乃ときは囚人乃望といふまたとふへ臣  
 乃諫言わか爲家乃爲國此爲用ぬれば榮う受れば福ありあべぬ衰へ受けぬハ福あるぞもよそよ  
 してとかく私欲にかなぬ事をいうるも是非なき事也我病にあたるとらハ苦き藥ぞも乃多痛き  
 針ぞと爲一あつき灸をもすへ一あれ病されはわか身も全きをうる故也私欲ハ人の病にして忠言は  
 藥石也その病いぬれハわり身もさかえ家國も盛になる事を一りても今日の心もおも一るかたぬと  
 てその藥石ぞさらふハ誠に下愚の最上也人君として之ぞたのしみ又はわれ人の人たる道ぞ盡して  
 舊染の汚風をあらハ民をあらたまて名をあげ父祖の恩に報一天の命を奉ざるにあるへき處に左  
 ハなくして酒をのみ色にふけりたからと好み家屋をさりんにしてわか身も家國も衰へ亡ぶるにち  
 かきをさのしむハこれ安樂する處私欲より出ハその正にあらざといふ處なり酒ハうつをさんす  
 る藥と思ひ淫樂姪色ハ心ぞやまなふものとのみ思ひて酒ハ身を字一なふ鳩毒にして淫聲姪色ハわ  
 か徳性をそこなふ斧なる事ぞあらすそれにこびへつらふも乃とも今日氣に入れハ今日よ一明日氣  
 に入れハ明日安一を思ひて明後日ハ君も國もほろひてわか身もともはらう一なふぞ一らむ惡むへき  
 事也その酒色の人をおほらすと又とくへ一至てつ一み深き人ハ一盃ぞ傾くれハそや常に變一  
 いふま一き事をいひなすま一き事をな一人にさらハるハのみか後にハ人と口論に及びて身をう一

なふもあり又ハ男女此間みたりハ一く成行て家た、ぬま、家國を隨ひてほろふその外淫聲をさ  
 げそ心も自然とあまめきてつる嚴重の行ひをも字一なひて乱亡のさかひよ入る色の人をさふらか  
 すは深一酒をこのみ聲をさくもみな此姪色の一ツより生一て其わさハひにさけれと身ぞう一なひ  
 大なれハ家國ぞう一なふ誠一おそれつ一むへきの最上なるにかへつてそれをたのしみておそれ  
 ぬぞいふ私欲より出ハ處ぞ其正を得ぬハづ也た、心の鏡に私欲の一物おほふもへ一金をみてハ道  
 にかまハるは一く思ひ酒色ぞみれハ道一かまハるたのし一く思ひ私欲一さかふ事は何の一やへつな  
 くいや一思ひ私欲一たかふ事ハ何よもかまハるすま、ろよく思ひてその喜ぶもたのし一むむいかる  
 もおそる、もみな一私欲中より出る故一ツもその正を得る事な一世に天魔の入ハり一なとい  
 ふそく本然の心の鏡に私欲の天魔の入ハり一といふにてなけハ一き事也桀討といひても本然  
 の善なきにハ何らすた、私欲の天魔のその善をおほハ一のみなり一かれハ人君一己の身にとりて  
 もさま一の私欲の味方多くして本然の善の敵晝夜にこかす一身をせむる事故つる天魔入ハ  
 りてみろくの世ぞならぬハ少なき也さ、それハ私欲と本然の善との二ツのみ也た、それを修行す  
 るハこか本統の心ありやなしやと心づくへ一さて敬といふハ學者の工夫すへき第一にして此大學  
 の道ぞまなふ始より終りまてはなれぬ事也敬ぞ程子の主一無適とぞかれ謝氏は常惺の法とい  
 ハ尹子は心收斂不容一物ととき一そくいつれも敬ハ一心の主となりて心のほ一いま、にとりはな



れぬやうなるやいふ事也さればとてかたくなになるにこゝろにて石にて手をつめしやうに取はさ  
うくつよして死物となる事也卵をとるにつよく握ればつぶれ手せぬるせばおちてしまふへにさ  
らすめるさすの間念くその卵せぬやうにする也孟子にいひたる忘るゝ事をわれ助長する  
をなけれといひて忘れもせぬ事也助長といふのわらうあへ一苗の乃ひをたゝぬう  
まゝにぬいて土より上に掲げて葉末のせいの高さやうにせぬ心を用ひ過てりへつて其苗のの  
ひぬのみり枯てあまふの類といへる事也此外室先生の悍馬を乗るやうに強くもせず弱くもせぬ  
心せ敬にたごへられたりたゝ一身乃あるにたりてものゝ番人となり事乃目付となるやうにして  
心といふ事を忘れぬ事也主一無適といひて心の外へいとり出ぬやうにする事にて書とよめのみ書  
とよむに一ツにたて外へちらす衣とされぬ衣をきるふ一よたて外へちらぬ事をいへる也常惺くと  
は心のくからぬといへる事にていひて心乃うちつねにいふせいよくくもりかゝりなくして本  
心になるといふさみ也惺くは瑞巖和尚をせぬ口くせにいひまをててもと佛語也心収斂して一物を  
いれせとゆふも心一にして他念のまゝらぬ事也勿齋の陳氏の主一無適の敬乃純常惺くは敬の明と  
いはれたりさて又主一のうちに淺深あり初學のものに一至たらんやうにする事也ゆひや徳を  
なすものよりいへる主とする所は一といふものなりさて敬乃工夫ゆひの諸説にて大抵わらるへに  
敬の初にいふとく一心の主人にしてあれよりて物に格り知る事と致さぬいひの何事もそらと

になる也恭をうちながら書とよむやうにて二ツなり心を用ゆる事はならぬ也その外誠意正心  
より治國平天下に至るまで一ツとして此敬をはなれていあらぬ道理也聖學始終をなすといふも尤  
なる事也心といふ事を念くわすれす氣つくる様になれ一寸の善とさゝて一寸の徳になり一分  
乃善とさゝても一分の徳になれともその心はいまゝにたれて存在せぬは百萬言の善とさゝて  
も分毫の徳ならぬ事也乃書たる一卷をみても敬なく一ツとして用いたゝ敬の大切なる事  
あれによりていへるべし

脩身

身は家の本也心の身の本也朱子もいわれ一とく意識なれば心れのつから正しく心正ければ身れの  
つから修まる理なれとも意識にて心正からぬもの有り心正しくして身の修まらぬ者あり大學の  
一條と一段と等と逐て行事故ふのなき竹のよくあるのには無あとなりあれとく説むに意  
と心の發する處にていふとくといふなり心いせといふ心走るといふとく也その修行行といひ  
せいで俄に心の内をたさめ正しくらんとしていひつて手のつけやう様もな故に黑白のさかり  
て出る處の心いせとまをすれば自然を習ひ性となる道理にして其心とまをなくになる事也され  
とも心の鏡のよきもの故そのくもりとちりも出るまゝそれを又くたはらふやうにしてつとむる



事也そのつとむるの心の存在する様にせするの敬の工夫の入る處也さて心まづまんどくにあれば身のおさまらぬといふ事いなしそれ故に傳にも身の修まるの心を正しうするよりするをいふは是也それをもわか一身天下の萬物に接しまゝなる事故このみいやゝおそれあわれむにつけて内心もそれにかたよるまゝいふべき事も行ふべき事も道をせしめて身修まらす家の齊いんや字もなきに至り行く事也それと傳にも親愛する處に辟より賤惡する處にかたより畏敬する處にかたより哀矜する處よりたより傲惰する處にかたよる故に好んでその惡を知り悪くんでそのよきをさるもの天下にすくなきや出たりこれ日々わか身の接まじひる處をいふるなりまづ親愛といふまゝ可愛くおもふの妻子也賤惡といふやこゝみ惡むとあるもおそれ敬しむ處もあはれまじひる處もおどろおこたる處もみなわが家内にある事也其家のうちに對して身の日々まじひる處につきつるその内の心にもうつりてかたよるまゝ身のたさまらぬ本になる事也むかじ或人の家のうしろの壁のくづれしを隣の人の心付てかべのくづれとり盗人いるべしといひて氣をつけけりその家に子ありけるがその子も壁のくづれより盗人のいるべきよしを父にいひたり父を尤とおもひけるよその夜はたして盗人入て家財をぬすみとりさりあゝによつてその主人の先づわが子の智慧のふかきを感じて扱又隣乃人の心つきまゝかへつて不審なりも隣のもれ盗まひりたるにやどうたがひしとら也その盗まきとつけしその子も隣の者もおまじけれと他人をいうたがひ我子とい

感するといふもみな愛憎の變としてその親愛にかたより故子を感賞しその賤惡にかたより故隣の者どうさかひしをかゝ又むかゝ衛の國の小姓に彌子瑕と云ふも乃あり王の至てひさうせられしとき桃をくひてその桃乃うまさをもてくひかけ桃を王にすゝめけれの王も至てよろあひ人々口を愛せぬものいなければと口よりわれを愛すとしてほめられたりその後彌子瑕夜る出殿して居たりしに俄に親の病をいらせければ君といつぱりて君の車にのりて家まへりぬそのよ王死して主の車よのれはその罪うるうらざるまわか身をすて罪をおかして親のやまひをとひしに至て孝とほめられたりしかる處ほと經てその寵盡さおとろへて後くひかけ桃を主人にすゝむるに至て不禮也主の車よのるはこれ又此上なき不禮也とて右の二罪によりて刑せられしとはしめは後後につみたるのその人のいさまよりしにもあらせこゝろつき處の初めまかりて雲泥のちひなるの愛せしゆへよりらぬ事をよくおもひて賞し愛せざるゆへその事をおもひ出してつみたる也おれその事をおまじけれとも初の親愛をかたより後の賤惡をかたより忘のささひひせしるべし扱又有形の寇無形の寇とて有形のあたの則敵國也無形の寇の今日まゝいるとあるの男女の情よりあて口に味ふ酒食身にさる衣服手にたつさふる玩物に至るまで皆是れかたちなきのあざ也さてかさちあるは敵のいつよせ來るといふも前にあれて一生敵のかたいらをはなれぬといふいなきさてその敵は爲まのほりと深し壘を高くしやぐらとけんてに矢石兵糧とたくいへ置て一日も油斷



せぬぞか—そのかたちなき敵のつねよか—のらどはなれま—ていつとせ來るといふゆ—れどそこ  
 りかたちな死故目よ耳よもこれせ—ていつか一身どかあみてせむるにその身をその敵せ—らむ  
 して用心もなくつる此敵はほろほされて—まふほろほされての後よもその敵をさどらぬ事也その  
 敵といふの目—一身よ接—まどつる處也—た—多愛する敵にかあまるれば其惡をも—らす—てつ  
 るつ其敵に身を失ひい—や—み惡む敵に—こまるればその善をも—らむ—てつる其敵に身せう—あ  
 ふそのかあまれて居てその敵をみる事いよ—狎れてあへて心に用心せむつる其敵その城中に入  
 りて目よふさき耳よおほひ口よとぢ心をなくす故みてみへむさ—てきあへむくひて味を—らむ善  
 をみて惡あ—とおもひ惡—さぞとてよさと思ふやうになるそのか—ちなき敵をふせぐ道の聖人乃  
 道にしてその城郭の仁義の道也ゆへに仁は人の安宅義は人の正路といふ也さて有形のあたとて敵  
 國より數万騎せめ來りてその城をかあみせむると死に其城中よある人風雨霜雪暑寒と事どもせむ  
 夜もねむ盡をやすます矢石をおか—て屏すらにかためをりやぐらに登るまのとき大義のいそが—  
 死のといふ事は一言ゆいわけ何とぞやぐら數も澤山にほりもふかく土居も高く道をけんをにてわ  
 が着る具足ももつと丈夫にとのみおもふ事也如此ふせがされは敵に城をのりせられて城ととに  
 わか身も失なふといふ事をおもへば也されども形あるのあたを力と以てふせかれその來るも去る  
 も皆そのまへよ—れて油斷する事もなければその城をおどさる—事いなし今いふ形なき乃あたと

て目よ耳にも見へむ聞へぬ敵は誠に晝夜のさかいなく一生わが身どかこみていなれすそのりた  
 ちなけれの力よも及ばむ計も達—かたした—此聖人の道どわか城郭と—てたてまもる事也それ  
 禮義もめんとうにおもはるくの衣服の定めをわわり物敷寄にて改め仁も義も禮も知も信もみなそ  
 乃あたをふせく道具なるをめんとうのなぐぬ事也とて打捨用ひせ故に一身主なく—てつる其無形  
 のあたを一身よ攻入て身と亡は—名をほろほせ也無形のあたをさる—事敵國の兵のまをならん風  
 雨寒暑晝夜のやすみなく打守り五常此道もたらぬとおもひ禮義三百威儀三千もゆつと多き様にと  
 思ふべ—た—かたちなければ人よあれてそのりたきどわか身に—た—まんとのみ思ひてわか味方  
 の五常五倫の道よ他人よ—敵にするよよつて一身落城に及—いさるものなきはづ也呂東萊といふ  
 人宴安の酖毒也おもふべ—らむをいひお管仲の語を論じていひらに毒の人をさるすゆの多きは  
 その毒の深さにして人をさるすのすくなきは其毒の浅さ也今酖毒をのみて死ぬものは千人万人の  
 うち一人ほと外のゆるまし宴安にふけりて身と失ふもの天下中乃人大抵みなそのどくにか—りて  
 死すそれを以てみればちんぞくよりも宴安のどくの深さをいかりな—と也誠に—かり坂につまづ  
 かす—て平地につまづき海に—まらせ—て溝に—まるの類用心すれいかへつて害なく—てゆたん  
 すればその害をうくる也その宴安といふの酒多ん遊興よ—まる事也その毒の数をいひわか志を  
 おこ—ら—氣とおこ—ら—むるも乃—あ—の毒也わか功をくつ—業をやぶるも乃はこの毒也と—月



をむなくおくらするものはあ乃毒也草木どもに名なくくちて酔て生き夢にて死せしむるもの  
 のあのどく也こか欲をほしいまゝにして次第に悪にあかれぬかゝむるものあまの毒也わか心の守  
 と失ないせこかうれひせとすれさせて禍よおちいらすものこの毒也あまの毒にかゝれ賢者も愚  
 一變一明者も昏に變ふ剛者も懦に變一身を穿しなひ國をほろぞ一世のためよわらひるこれ宴安の  
 どく也あのおそろしきどくもどくとおもはせおそろしきと思はすてなれしとみて何ぞを宴安  
 ののみ居さきとのみ日夜工夫あて宴安をふせくわか身方の聖人の道とばかりつてわか敵のやうに  
 ふせくまゝわか身その毒にかゝるともいらせ人もその毒せいらせして天下の人みなその毒にかゝ  
 る之とちんどくにくらべてはその人どころを事至て多しあれらひ我いふ無形のあた也無形故おけ  
 れせあてしとむもおろかなる最上也宴安のどくはその毒は目にみへせしてわか欲しかなふ故無  
 形のあた也ちんどくはその毒目に見ゆる故有形のあた也有形のあたひ人之をしる故その害なくそ  
 のどくなしたくかへすくも無形のあたひ人いらぬまゝその害その毒にのみあふ也よろしく心得  
 べし古へより名將ともいふ人敵は計ごとくに中くのらせ敵のいつはりにも中くあひねともた  
 く軍中乃女のためにはその計ごとにおちひりそのいつせりにあふ敵をほろぞせともその軍中の敵  
 へのたせ敵にほろぞされねとも軍中の敵への必らせほろほさるゝ物ぞかゝあれ宴安ちんどくの  
 たとへにもよくあふ事也女の智の敵の大將よくらべては萬分の一にもたらねともその有形と無形

とのあやにてそなへるとそなへなきばかり也敵よりはかる事一事あれひ一事によつてわか思慮  
 をあめて猶おそれ猶つゝむ故に敵の良計あるにもその計におちいらす婦女は慮は浅くしてその  
 智もくらく故に一言とまゝして猶なれしとみ猶もたんす故よその計至てつたなれせもつるよ  
 其計におちいるその上親愛にたよるといひてよく愛するくもりがせんと心のかゝみの  
 一物になりてはなれぬまゝ外のかけもさゝせしてそのはかりをそのいつひりをてらしてある事ゆ  
 ならぬ也あれにてそのかたよる處をり得へ敵よりせめ来る矢玉もつよからぬよていなりやり  
 刀も利くらぬにでないなけれ共たゝ外よりせめ来れぬまたあなまより外にてこれをあせぐがうへ  
 こか内心にまよひの雲なれまゝ心のかゝみと以て敵ののかりをそのらせかかるは婦女は耳さゝや  
 さひわの内におたぬるまゝと矢玉よりもつよく涙をなかりていつはれの内におひくことやり刀をり  
 も利し内よせめ来るがうへ最前親愛のときの一通りにてわが内心もみな先のものゆなりて智  
 も道を奪われし得故その計そのいけり道と以ててらそふやうもなく智と以て察するやうもなく  
 さゝ昏乱して度と失ひつるまゝわが身をたしむるゝも乃也誠は無形のあたのおそろへきせしるべ  
 しそれもどが心存在あてよく身を修むれば主將内に居て誠の堅固なるてくにして無形のあた萬騎  
 よせ来るともわが道を以ててらしこか知を以て察すれの中くせめよる事もならぬ事也こ乃段に  
 至れは有形のあたよりもおそろゝにたらざる也



扱又誠意正心脩身のケ條もみなりよひしてみるべし誠意よて正心正心よて脩身脩身にて正心也さ  
れどもそのケ條の立名はその次第也それをとへんに刀を造るによき地金を求めとき水をもと  
め炭火をも吟味し合抽も上手とを悉らひてうち出すの則格物致知の段也そのうちあけし刀乃やま  
をつけそををつけてひつみと直すの誠意の段也その刀と石にかけていくへんも研ぎあけて誠の  
氷のこくするが正心の段也そのときまゝにておけば雨露のあたり手のふれ物のさゝるにつきて  
忽ちくもり忽ちさびを穿くべし故に厚朴を用ひて刀の身のあたらぬやうにさやをこゝらへ物のさ  
はらぬ様にうるしを以てぬり或は芋にてまき又ひかな物をつけて念をいゝの脩身の段也勿論格  
物して知ひらけぬならぬ事故初に地金を悉らひてきたうべしその格物も誠意もたゞ一ツに本づ  
く事故さうもどぐも太刀の身一ツに本づく也脩身の條なけれは正心も成就せざ正心の本なけれ  
は脩身も出来ぬ道理にして刀の鞘ありて刀もいよく全く刀の身の本ある故さやの本意も失ない  
ぬ事也刀を帶する迄あの四ヶ條はあれられせこの四ヶ條全くとてその刀乃用をなして敵に  
うち國を治むる也脩身までにはあの四ヶ條はなれられせこの四ヶ條全くとて身と以て齊家治  
國をあたす事也この處にて初まきたらされは其刀の用なく格物致知のきたいなけれは明德の功も出  
來ぬ也心正しらせしめて身の威儀を慎みよき人とみせたくてもならせしめて誠の身の脩まる事  
ならせ身を脩めぬわわか心も始終一へんのかたよりなく中正を得ぬ道理にして刀の身ならしに鞘の

ならせ刀の身正しけれはさやを出來て又さやある故に刀の身もさびせしめてその刀の用も出來也始  
終あのとひにて此目せしるへし身とさまつて心正しく心正しくして身脩まるあいのちの道理也  
今君前へ出れし手をつきて首を下るとおしへ君の御意なさるゝときの手についてへイトいへとお  
しめるのふれ禮といふものなりその禮によりて手をつき首を下ける事や手まへの形の外で仕なれ  
てくると自然を穿ちまてその禮がみあみて手をつくまいと思ひ首を下まいと思ひてもどふも君  
の前で首を下けぬならぬやうに心へしみてくる物也それといふも心の本體にこの禮をいふも  
のそなりて自然とある事故それとより形のうへでおしぬれは心もそれによりてまんぞくに  
なる事也又衣冠束帶狩衣上下といふ様に禮服をこしらへおし故その形よりて内心も自然を正し  
くなる事也やはり禮にあらされはみる事なけれは事なけれは事なけれは事なけれは事なけれは  
玉ひてそれてうちの仁と得ると孔子乃のたひしにてもよく考へるへしいまそ乃位くの供をつ  
れるが禮也さてかま馬よのを鎗のさみ箱もたするがあれ又禮也自身も上下にては狩衣にてはそ  
の位に應じたる衣とさるゝ禮也さてあの禮をそなへては茶屋へある事とならず煮賣やへよりて物  
くふ事もならず居酒屋にて酒のむ事もならず女などへ行ちかふてもいゝたなくふりかへりてもみ  
られぬも乃也さすれの飲食男女の欲にも心になく自然と遠ざかるも乃にあつてやこれ形のそとの  
禮にて内乃心の飲食男女の大欲にさへすこゝくはなれられるも此也さすれの心正しくしても身の



おさまらぬ又心乱るゝに至りて家のとこのんやうのなすへて古の禮とて元服葬禮婚禮等の吉凶平生のよきはとくの禮よりて自然と自分もいらすにその中に居てあゝきに遠ざかりてよき方へよる様になる事也いらすゝ帝ののりにたがふといふ事もおなじ事也日本と唐士と今といにしへとかわれともその禮はみなおなじ事也その禮のくわゝきゝない唐を日本とはかれとも不幸にあへのかならむ禮あり父母に孝をつくしてうやまふ禮あり夫婦の別の禮ある様にその禮の大意の地をへさて代を重ねても少くもちはぬ事也それぢちがはぬ處にてこの禮も智も仁も義もをな天より人々の得て心のうちにその五常のいたゝみある事をうるべゝこの日用の禮義作法にとりてわれもいらすゝ誰くもみな聖人の道に在る事也いまそれをたとへんに衣一ツ米壹俵にてもその手間大抵の事にてはなき也かひこをそとて桑をとるよりして繭をよて糸ととりそれをへて機をおり又さらゝ又染て衣とする事也米も水にひさしておれとまき田をかへして早苗をうへ水のさゝひき又草をとぬきとり秋にいたりて刈おさめ扱ととりうまつきて米となす事也一年かゝりて衣も出来米も出来る也されどもか様いたゝたる事と農夫蠶婦の思ふ事故あへてたいくつともまごり遠ともおもとぬ事なりさて町人市にのそみての煙草ふくの間に反物なども百端二百端もよりかひをいせきはらいする字ちにも米の千俵二千俵をもうりかひすおれによりてその町人自慢して一年かゝりくらうして米をうたて衣とせいすこれけわづかの間に衣は百端米を千俵よりかひす百姓は

と埒なき者のなるといふさすれの天下中のものみな町人になりたればたれが衣をあらへ米をいふつべき農夫蠶婦か一年かゝりて米と衣をあらへる故町人もそをおかひよてその賣買も出来るもの也内々の百姓のおおけにて町人のトまんも出来るといふも乃也聖人天地の道もそのとゝあの禮の義のといふ面倒といへといつか聖人天地のたかけよて手前くもいらせにその道よのいりて父母には孝君にの忠子をかひめぐり兄をうやまひするといふやうよ今かの手をつき仕宜をなす腰をかくめ膝をかくめるもみな自然の道によりて内々聖人のどかけなるをいらぬなりその外一年のいふめの元日なれのとて元日のたれの家くも禮をととのへ麻上下をときて禮をいひありき親類にも酒雜煮など出きおれ人乃禮を年のいふめにあらふる也その外一年の字ちには五節句とて五よびの禮をさておしへ一月のうちには朔日を十五日を初めに又禮をたゝておしへ一日のうちには朝といへば髪をそろへ口をあらひ面をあらひて又禮をなすおのそく一年一月一日のうちにはゆいおぬやうよ自然と禮ありやうよ事とのみをもひてすれどもおれその禮にそなれて人か一日もおらぬといふ事なりらぬ也一年一月一日の外も婚禮のまたの出仕は髪置の何のといふ禮ありて又いらぬにま乃禮によりて人道をいふる也朝おきて口をあらはぬ一日氣味やうく思ふやうよ自然と禮のこか身にいみまみと故手をつく處にて手をつかねならぬやうにあり行くばせてゝありかたき聖人の道のおかけ也聖人の道のまゝに轆轤にて頼戸物をつくるそくをゆの中にありてのこれと



しらせ人もしらせよいつの茶碗に徳利になりて土もしらせ徳利もしらせに化する事也いま天地聖人のおかけにて世界の人かしらせよよその轆轤の字へよて孝子あり忠臣になり烈女になりて行く事その内々のおかけはしらせよてなに學問の聖人のやいへとやひり町人乃百姓をわらふやうなるもの也扱又子共の時より且那様のの、様のといひて佛神のをくいひきかせ御通りには御時宜する事といふや字よ自然と心にしみあむ故成人奉仕の後よ御筆をと足では踏れぬかけでも常談にもあしさまよせられぬといふ事心のそまより出来るも元より五の道をなひりし心あるうへに子共よりしみこみたる故也其父よ孝といふもおなト事也さすればわづか手をつき首を下けるの二ヶ條にてもそれから内心へ入る事故忠臣孝子乃大さうなる處へ入る事也つねにわづかの禮トやと思へと至て大きな禮也それをひひと一二寸高き土とはつえの先へかけてうがては一二寸の土はあくなる事足にてふみても一二寸ほとひふみへらしてそれほど大事とも思ひぬなりされと出水のとき堤へ水かひたくとつきて一二寸ほと堤の土が水のうへに出ておれり川の近所の人家此一二寸の土なくと忽ち水中となりて魚と成へる有難き土かなとわづか常思ひし士も今よてり千金にも換かたく思ふ道理也その如く手をつき首を下るは禮のうちよてもわづかの事にて堤の字ちの一二寸の土ぐらゐなれどもその人道におきてその五の道を保つ處至て大きに至る事也しかれば禮紀にある禮とみておかしき事におもへども意味深長にして陰に人道とたまくる聖人の道なり聖人の

道は天地の道にして天の物との玉はされども四の時行はれ萬物生くして下知に背かぬとく桃にても梅にても櫻にても春ととりて春の花さるん夏ととりていざ葉と出さん秋ととりて實とむすべんと心よおもふにはあらせ何となく春の發生の氣天地にみつる故根より枝の先までみな春になる故木よしらせ花もしらせに花さくなりその暖に日閑なる春の氣いつとなくあつくなりて夏よなれり長養の氣天地にみつる故根より枝の先までみな夏よなりて木もしらせ枝もしらせに葉と出す也そのとくわれもしらせ人もしらせに聖徳よ化せるはあ、也人は四季とてわかわれども春に至れり眺もへんとて春の眺と也夏に至れり夏の眺となるやうに天地にあらぬをのみを天の氣にしたかふ事とるへり右に付て樂の事といふへ志禮の樂記よとくわいければその事いふまゝ大抵といわんに人の生身故うれある事何れいたのしむ事ありその樂しむ事によりて淫に至れり大よ人道に害す故樂といふものと製作ありてうたひ吹た、たしてたのしむ事也樂して淫せざる中道に至りて自然と人も餘念なく心のそまて和して筋骨ものひくとなり行き人の心すなをに成て善にす、むやうになり行く也いま琵琶の平家の酒のみてはきかれす土佐けれなといふ淨瑠璃のまたちとやわらさぶんと長うたに至れば淫心自然と生して坐してた、も足も出すやうに成る事也これも外より耳にふれて内心の正と得ぬとそれにてもするへ志散樂のうたいは酒宴中にてうたふもまつ着坐し直し腹をはりをぞかへりて正しくしてうたふ也長うたやうたふのもはや首とふり手と口



にあって、正しくらぬ姿とする也うたふ所おな一口をり出れどもその小き事ハわれいらぬに身も正しく心も正しくなりて正しからぬ事はわれあらぬに身も心も不正なる事也それをへ聖人のつくり玉ふ此うへもなき樂をくらんまはさざりて人心の正を得る事誠にみるや字にある事也それをへわが手にてする處作といふものも大事の事にして手のこさがいつか心にしみあむ事也淫奔の所作をする長歌のおどりをおどりにて心にて正しくと思ひての中へいつくになりて一手も人前にての出来ぬ事なるへ心より淫奔の所作にならぬ手へうつる事にてはな一それ故武器を所きなふ町人のつれもすあし武はりし氣分ある物にて書物屋は又ちと唐なと好む心ある物なりその外藥種屋の醫者になり車力のすまふとりになる類にておろかわさか内心に入るゆへつるそのこさによりて姿もかはり心も化するなりこれ禮樂人の形のそとなりて内心に入るをさるへおれにこれの心さへかわらぬは朱に交りてもくるからす黒に交りてもよとそれ世渡る爲にいへども形のまいるからは心も是非多しらぬならぬ事にてのちには心もあなその中に入る故におれはまよきとも思ひてケ様一た事とのみ思ひて狐にバカされりるうちにはおさるをふあと思へともバカされされのやこれか平日とおもふや字になる事也それ故酒に至てたべ酔たる時ハへつて酔はぬといふまゝみな心も身ものまらぬその邪その悪に入りまへ手前にていれぬも乃故正心の脩身此本にして脩身また正心をたすけて相もちといふは是也脩身の脩ハ脩復の脩にて正

心にて内の本の出来ても脩身のケ條よてまたその威儀禮容言行なとを脩復してすまもその中の正を失ひぬやうにする事也傳に辟すとひふのつたよる事なり哀し多樂し多よろこびいかるよつて心かそれにかたよれの彼の心の鏡に一物か出来る故さす影もさぬやうなる事也たとへわか子をばらぬくおもふそのかわゆきにかたよる故わか子のあしき事をいらせてたへ導く事もならぬやうになりこか田地の苗少しもそつやうにとねがふそのねがふ心にたよるゆへいつみてもわか苗の大きき成らぬと欲につきて目のみへぬやうになる事也木の葉は至て小さく遠山又ハ舟の至て大ききれども海邊にのそみてみるにわら前に木一本あれハその葉にかくれて千あく舟も見へぬ物ぞかこかれのわか手もとにかさよるといふ一物あれは至て大きな泰山も見へすわり心正しくしてかたよる一物なきときこの毛の先もみぬるとのなりあれかたよるときハその一物にさへられて心の正を得ぬ道理也あれたとふるに至てれたる空は一物なき心の靈妙のか、みれたとふへ雲の出るハ心のか、みの一物あるにさふへはれさる夜の露霜もおけとくありし夜の露霜もおけぬか如し一點の雲其露霜をふせくにあらぬとをその一物によりて天地の氣のへたたるをさるへさして又傳に親愛する處畏敬する如哀矜する處賤惡する處赦情する處かケみにかたよるといふは親愛すへき所にて親愛するハよけれどもハ親愛の一物か、みにかたよりにて外のけさぬま、靈妙乃心をくもりて親愛するもの、あしきとよきとおもふやうに是非



の心をそのかたよる一物にくらむ故脩身はならぬといふ事也そのうちに敖惰といふはたまりたこと  
 といふていはく俗にづるけるといふやうなる事也其のづるけるはよらぬ事なれしかたよる  
 事の扱せきとんとなき方かよかるべしとうたかへともゆるけるといへばあき方一人はとれとも  
 孟子の風によりてみずといひ孔子の使をりへきて琴をひかれしもこの敖惰也敖惰すへき處よてが  
 うたするの聖賢のする處也其のこうごよかたよればその正を得て修身のならぬ事也そのうへ  
 づるけるといへばあきといへども誠善に對してづるけるの所いければ悪に對してづるける  
 はあき事にはあらぬなりたとはは貪といひ吝といふのあき死事にいへとも寸陰の日のかけを  
 むさほりてわか人道をわき身にあらざるのみおもふのやひり善を貪る心なりしか本心を少も外  
 物にとられぬやうにせよ本心を千金万金の如く大切にするはやはり善を吝む心也貪といへん金  
 錢をむさがるを吝といへん金錢をおもむと取る故あき名になれともそれをよき事に用ゆれば  
 やひり君子の道なり其の敖惰のづるけるも同ト事也いま人親愛賤惡につきてよろこひいかるも  
 こひりせしらぬ故也他人これせしやみにくまひかりてをよし他人のわれを愛しきたりまはと  
 ろこひてよよけれとも大凡わか身にあらざるて貴きと愛し賤きといひやむ事也われ初めい  
 やしく後貴けれともわか身のもとの身なり人初めいひやみしものも後に愛しうやまふこれ  
 これをうやまふのあらむわか身の貴きをうやまふ也これ初め貴く後にいひやけれをもこの身の

もとの身なり人初めうやまひて後にいひやむこれこれいひやむにあらむわかいやよきといひや  
 いむなりさらわか身にとりて毛の怒り喜ぶべき事なきはづ也それを貴めんとろあひ賤め  
 いかるわか心もその貴といひやよきよつきて心のかかるゆへなりた善人をしよし悪人とい  
 ひよむの天下の公道也されどをにくらうと思ふ人うろ影をみて悪く愛する人うろ影も  
 愛するやうに思ひて人もにくめはそ乃家のうへのからすさへにくといふことく何もかも悪きに  
 かちよりてよき事をも悪く愛すへき事をして悪く思ふににくきに我心のかみれくもせよゆへ  
 なりぞ心得へし况や人主たるも乃少もあににおいて愛憎の變によつてよき事をもにくみあき事  
 どもよし最負の人と立身させ悪む人と退身させるやうにあり行て怒に乗して道筋を考へすつみ  
 重く喜に乗して道筋をも考へす賞を重くするやうになれば齋家治國の本もなくなる事也猶ほ齋  
 家の條にくはくくするぬ世の徂徠學する人の人君は身の行ひはかまはせたと善を用ひ賢とあぐ  
 れはそれよてよといへともわか心のかみくもりてどか善とする處はどか私欲あふ人なれん  
 きいめて悪也わか賢とする處わ物すきにあふ人なれんかならむ不賢也どか心わか身正しく修ま  
 らぬの人をみるといふ事ならぬ事也われも人にして吾どおなき人をみる事故是非なれるはづ  
 なり然れども我心ほん乃人心なく多ていつもいふてく心も身の行ひをとなとりけよものふ類す  
 る心からはんの人をみんしての畜生の人をくらぬてくれぬいつなり我もほんの人になれんほん



の人もみゆるはつ也賢をあげ善を用ゆるのわか心平く蕩くと正一からねのならぬ事也  
齋家

と、のふせいふの着物をとてきての行丈も下着も上着もみなそろひたるやうなる事をいふ也さて  
そのそろふといふは襦袢のめきは上着とひとつになりうへ狩衣の袖の短かくて襦袢とそろふやう  
なるといふにあらざ襦袢のドめはんほととゆきにそろひ下着の上着もそろひ又その上にさる狩  
衣のかりきぬほととのめきになるやうに二寸のものに二寸一寸のものに一寸とそれくほとくよ  
くして短くあるべきもの、長く長かるべきもの短きをやうにそれくほとくよく行届きたるとと  
、のふといふ也おれ家といふの家内などいふやうなる事なりその家内には父母妻子兄弟親族も  
あり家來のうちにも大身小身さまくのものある也そのものを愛す、愛し敬するは敬しほとく  
宜きとまろに行わたるをと、乃ふといふ五味なをの塩梅の宜きはとて得五聲なをのよくと、のひ  
たるとく味にのあらしきもすきも聲にの清きも濁るもあれともいづれもそのほとと得てと、のふ如  
くなる也五味のせ、れふとてららきも一匁あまたも一匁すきも一匁といふとひら一面なれ、五味  
の和するといふにのあらしきぬなり五聲とてもそのとて故は盤渉平調一越調といふとく調子も宜やう  
にありて和するやといふ也その家とと、のふはこれ三綱領の新民ののトめ也家の本を身よして國  
乃もと、の家也その身おさまてゆかは家もと、のふあれ新民の本の明明徳といふあれ也傳にと君

子家を出せして教を國になせといふて聖賢の國を治むるはそのおへの實身にありてさて家に及  
ひ國にあふれて國よ及ふなり悪人の國を乱すもそのことく身にあふれて家に及ひ家にあふれて國  
に及ふなりそ乃家と國とに及ふ所善なれ、の治り悪なれ、のみざる治乱といふては大よちかひたる事  
なれとも唯方寸の心の正と不正に本つく事なりそれと最明寺の如く天下中であるきて善惡をあ、  
ろみておせめんをきるやうにて、力のみ勞えてその治の中く行と、かぬもの也その字へ一人乃  
善人を、猶又導き一人の悪人を、おへ導くやうよして、一生さちても天下中に行きたる事にて  
、な、木の葉のみとりなるつやもよく枝も茂るやうにとあして枝に出をかけ葉に水を、ぎても  
力のみ勞いてやくにた、きた、その根は土かひ水を、ぎてたけ、根よりみきに及ひみきより枝葉  
よ及ふ也根、人の身也みき、家也葉と枝と、國也身よりして家に至らね、國へ行と、くへきやう  
、な、まつ家よ居て父母に孝するは、これ國中の人の君につかふ本也家に居て叔父の兄の婦のとい  
ふ目うへのものと字やまひて弟の道を盡す、これ國中の人の貴人及び老人又、わか目上の人につ  
かふ事本也又わか家よ居てわか子、か孫よ慈の道を盡す、これ國中の人をつかふ本也流の本とに  
て、その末の清ん事をもとめ木の根をからしてその葉の、けらん事をもとむる、至てのおろか  
なり又國を治むるに至ては少し利口なるもの、猶、その術を用ひて國を治むをいひてそ乃本より  
及ふとまり遠くとするなりその智をのて、ててよくより成就する事ならば聖賢の國を治むる



に身と修むるといふ迂遠の事とはおへ玉ふまゝいま聖賢の教を捨てて己か利口にて家國を齊治せんとするはわか才智聖賢にまさりたりと思ふなるへその智といかなる智にもせよ國中は萬をもつて數へる計の人々のあらむをどてのかり事に入るといふやうなるうまさ事につけてならぬ事なりそれわか利口にわか目くらみて下の云はの上へ達せむ下れも乃みな上へへつらふとはいらせいで我のかりをよて國も治りよと思ふ下愚もあるなりいとわらふへとも我智恵にての妾婦をとたまふおふせる事はならぬものありことへはわか口辨まかせていつのりを云ひたれのとて既にそのいつのれる事にはにれねども顔色に何にもあらわれる事故妾婦つれれものといや誠とあらぬをいれどもかへつてそれを信するまねする故とふく計りおまよのりたると思ふも實のすでに妾婦にいつはられし也辨口智恵よて妾婦さへあざむかれさるにせふして家内の内の人國のうちの人の残りせあせむかるへきやその愚とあれよて知るへし詐といふものいいかやうに當時とあさむきてもほごへていかならせしるゝ物也誠といふものその時にいれねどもほとふるほど著しくなるも乃也故といつはれし心勞して日々につたなるといふなりたゝ眞實より出ざるおどいたをへその時その坐はよき事にもせよ末もつゝかされしその事なきとおなり事にてあへつて害を生ずる者なり國中の億萬ともなれ人々治むる事至て有難きやうなれどもたゝ私欲にからて本筋の道よちかへる計にして手乃ををかへすよくに行はるゝものゝふ也一日已に克ち禮

にかへれば天下仁に歸すと何らせやたゝ眞實になき故家國の政も行とゝかぬものなり家よ居て己か子と育つるにその子うまれてほごなくして言はも手足をいたらかねどもそのなく聲によりて寒きあつきひたるさをりてほごくの手あてをなせいなきもやむなれいその願欲にかなひをいるへしその聲の高低緩急にてそれとるに何らねどもたゝ己か眞實乃かひおきよりおある故子とをたつる道と學ばすして誰にてお育ておふせぬものはあき也國中乃人はみなわか子にしておろなる小民とても無智のあか子ほとよし至らねいわる眞實のいかゆきよりその小民の疾苦と察すれの家を出せしてもその情偽願欲目の前よ明らかにしれぬべしをねにその眞實たゝねいませ臣下のそむくも氣のはなれるもいらせといふの誠よ智のたらぬにておなしたゝ私欲におほはれて眞實を穿たふ故也堯舜の禮樂とても眞實のいかひおきより出たるも乃なり一目民を見るもかひおきより見一念民とおもふもかひおきより思ふやうに成行の一言出ると手足と動かすも皆眞實のいづなれい誠に天の四時の行いれて萬物の化生するがとくにひくべし天乃冬もりのおきの冬天の秋もかはおきの秋にして風雨霜雪寒暑四時みなかはおきより發せぬいなえあれどりも直と聖人乃徳の家國に及ぶ處なり扱又人君の身にして一言の善一心乃悪みを國家の治乱にかゝる事よして一日二日萬機ありといへるもこの處なりわか邪を反すれい正よなりわか利を反すれい善に也善を反すれい利になり正を反すれば邪に成てその間に髪をひれぬ心よりあて言といひ行といひみなそ



れより發ちて出れり治といひ乱といふもみなそれに應じて出るものなりわか心乃今日物にまゝの處一日を以てりぞへたてられねと心の發する處また一日を以てりぞふへらせつるにその發する處國家へひつけて行事一日を以てりぞふへらざる乃多きに至れり萬機といひふ也眞實より出されは妻子もやいなわれず況や國の治まるべきやうになしそれ智にておまなんとするの手足のわざにて人をなげんとするが如しこれより力あるもの、肱のもどらす事はならぬありのやさむのに迫付事ならぬといふてくそのわざの屈する事あるがごとし李斯がわか智術にてやらんとせいかさも天下中といつる事のならぬを歎きてつる書をやきて民を愚しせんといかるが如しその術智の窮せざるあれにてあるへその書をやきて天下治まらぬ聖人天下に爲し書をあつてへられたるの聖人のあやまちといふへきか秦とつね二世まではろびをみて聖人のあやまちにあらざるをるべし三墳五典よりして聖賢の千言万語をなかはぬきより發せぬをその何ゆいわけ何もいらぬ赤子とかわぬく思ふ一念よりしてよやなかむとも乳とのまゝ兩用をせするなども何かしらむ心へ徹してふと心つく處がおほりたその赤子の情もかかふや字もなぞ行也これが誠の處より出されはケ様くといひていびてもそのわけも是非をいらぬもの也況や何ともいわぬ子の情を以る事の猶さらの事也無聲の聲を以り無臭の臭ひを以るもみな誠の一筋をり出るとするへその天官乃書なといひて軍家に用ゆるに敵城の上れ氣を見て吉凶禍福を以るとさまくの氣乃形をもつて

いるといへども左様なる事にては決してなく無形の形を以るにてやなり氣といふ心の發見也心をもつて心を見るにてなんの事もなくこれのよゝあればありとふと胸中へ浮ふ處か聖人の卜軍家の雲氣を察する多きこれ也それと理をつけ工夫をつけたればとて人欲のくも猶くおほひて手まへ勝手にほかにおちぬものなり男女の情をかよひすのわづらたらむて自然と先の情とわづら情と感へ應じている也感せざるまへの應せむ應ぜぬ又相感してはか情乃うこく事誠に目もみへむに髪をゆれぬ處也そのよく口にいひてその理に服すの心服にあらむ無據理にふくす也聖人の國を治め天下を平にするもみなこれ感應の處をりして風に艸のなひき靜にひよきの應するやうにあり行てむといふ理くついななき事也その理くつなりてケ様といはるくののほん乃ものにていななきを以るへ志鎗創術は仕合よケ様といふ理くつ乃見へた勝はなきもの也ゆへよまの太刀よて必らず勝といふ太刀は師といへども弟子にいつたへられぬ事也やなり不立文字の處たりた、信實の一ツ誠に天地をつらぬくやうよ至れば齊家治國ほりにすへき事はなき也た、其信實が人欲まゝりになる故純はくなる信實にてなくそれにて感應のなきを以らむて正心修身のほりよ治國の道あるやうに覺ゆるものもあるぞかいはかに道あらば赤子を育つる術もあるべきなづ也その術かあらはその術を學びて後よめ入すべけれど左にてはなく誰にならばすまても子のものゆきといふは天をり持て生るゝものその生るゝ處をもつはらになてさへあれはれいあふ彼れりふと心つ



く處みなりぬ心の外にまゝり物の他念かなき故赤子の情をも得らるゝいつなりさすれば家にありての父母兄弟妻妾及び親類家來乃痛き痒きをも自由といふ人の情を得ぬといふ事なき道理なりそれ父母の心にさうひ兄弟とむつちあつらす妻妾の間正しからず親類家來なるゝやうになるのみなその情を得ぬ故也なせものいわぬ赤子の情を得て何ゆかゆふものゝ情を得ぬぞならぬ信實の一すちに行とゝかぬ故也至て鳥をよくかふもの鳥のやうすによりて餌のうけんをいつもとりの勢よく寒さをさらふ鳥も寒さぞの籠ましかわれぬ鳥をも數年籠ひてかふなどいふの鳥のかのめさの信實まゝり物の他念なきまゝ心の靈妙よて是非鳥の情に應ずるなりされぬ聲あは聲をもきくべし臭なきまほひゆかぐへし形なきかたちもみるへし心なき心をもゆるへきはたゞ信實の一にて外に物なきせしるへしそれによりて天の靈妙を疑ふへらるる大學の傳にいふ齊家治國みなこの處のみの事也男女乃情の天の道よて萬事の根といふもまゝりなき信實の一ツをいゝたる事也曾子の外へ出ると他家にのまりて母のおりゝに俄に曾子をとひさく思ひて指を嘴あゝかゝ曾子野山の先にて自然と指よあたへて婦りけるやうに信實の一ツにてそのそくになる事なれり天下のひろさを萬人のれほきとて何の術もなく信實乃一にて行とゝく事うゝがひなきそれ下情ぞいらぬの下なけきひさかねいらぬのといへどみなわが信實のたらぬ故の事なり啞子といへるものゝ耳もきあへぬものなれとも自然と文學とおほへてかきてみすればあれりの字ろの

字といふをうるごとくとふもた理くつといふ事なく心の靈妙をそれにてしるべし目明の人の五色せしるも生ながら目しる人の五色せしるもみなおなじ事なり目明の人黒きいさうといふ事はいれどもあふいたいろといふ事口にはいれき目しる人もくろきいさうといふ事いれどもあふいたいろといふ事と云れぬなりいわれぬ故に五色をせいらぬといへども目明乃人も五色といこれぬいたれなき事なりさすれば治國齊家此術のあふせ口にいわれぬも智愚とも心にしる事也そのしる事は至てむつかしき赤子をさへをたてゝその情をうるよあらせやいせんや口にていふ願訴訟にもせよその是非善惡曲直のしれぬやうはなきはづ也無絃の琴をきくといふもこゝといひたるものにして目ありて見耳ありてきゝ鼻ありてうぐふいあらせ心ありて見心ありてきゝ心ありてかぐ也されば人をしていふも耳目の及ふ所をのみいふにはあらせみな感應乃所なり神の感應も誠の一ツよりほかのなきたゞ赤子の情をうる處にて飲食起居みな神明の感應にあらざるのなきといへとも高く遠きとく思ふべからせ至て淺くして深く至て近くして遠き事をり我友本田彈正少弼忠籌朝臣のいこれりへの政事とするの斧にて我頭よを腹まで二ツにわりて見せての上の政事にあらされぬならぬ事也と尤の事をもと感しあひさりそれにとりていわんに王者の國中の民をみなわか赤子とする事也況や一家中の家臣ならばみあはか赤子なる事しるべしとすれば人君は父母よして家臣の子也父母の子を育つるよいまわか子がいかなる事とするやいかな



る樂しむとするやといふ事も一らぎにせる父母は誠の子を育つるといふにあらざる也父母は何をみるもみな子のため何を行ふもみな子のためとおもふ事故か子の一言一行その外萬づの遊ぶ事までみまゝ父母のりりてゐてあの遊ひの害なきものなくさみの害なけれとも後に長くていあらんやいふやうにさこそあるや字乃事いさつらせもいからせをきて子の心のびくとらするやうよおきわつかけてもあないち又は碁將碁のかけ事をばくち盗みのまきよになんかとその機を察してしかりいまめそれにてさかされと土藏へ入又いはり打たせてつかんすあれ又其悪長してさかされ涙をながしてかんだうそその勘當するもわか外の子供の僻にならぬやうにとおもふてやひりよとめさの餘りより出る事也扱人君臣下を子とおもへ臣下のする所いま何ぞ好むや何ぞなすやといふ事もくわくわくおきて扱よからぬ事なれども道に害なきをばらぬりほにて捨てときあからぬにても末々害のあるへき事は長せぬさきにかり又は遠慮閉門等させて何をぞよき人になりて家を久くたもつやうにとのめきによりてかり閉門せざる事也そのうへよといよくよからぬと涙をながしていせまをつかわして其家をほろすとも又はかの臣下へうつらぬやうにとやはりかわめさよりおこる仕置也賞をいひ罰といふもみなかこめさの一ツより出る事にして目付等をつかひて下の事を委しく知るも下をせりてゐるにあらざるよきてやりたき故の事也さて寛仁大度といふはその事委敷りて居ても表へ出さぬ仁怒の道により

て居るを大度とといふ也下の事などしらぬといふよはあらぬ事なりくわくわく修身録といふ書にしろしたれのこゝにあらんさきこれにて人君乃心を知るべし信と仁との二ツをいふなれぬ事也扱また傳よもいふよく一家仁なれば一國仁よおある一家讓れば一國のづりをおこし一人貪戾なれば一國乱と作すその機かくのそしこれと一言事をやより一人國を定むるといふとあはれ齊家は治國此本にして修身は齊家の本といふ事此証據といひたる事也堯舜の天下を治むるも善とすいめ悪といましめ桀紂乃天下を有するるときも善とすいめ悪といましむその處のかはらぬとも堯舜の掟の我身とひやつし出る故民一たがひ桀紂の掟のこが身とちかふ故に民は一たがひぬその故よその法令といふものいさか身その法令になりて後にその法令を出さぬの法令ありてもむなしく行われぬものなり君は美服と着て國中へ質素を令し君のつとめせりて國中へ學文とせしふるの類にてはその成就せざる事うたひなしたとこれといふも眞實の一ツより出たる事と天地とならび行へるよとるべし傳にいふ其家人よよろし一へて國民をおしふへ一兄に宜しく弟に宜しくして國民をおしふへ一其儀たがひせりてあの四國を正しくすなといふその初めいひ赤子と養なふ信實にて四つ海入しまの先をも正しくおしある事といなる事なりた天地にみち天地にふさがり天地に參なるぞいふ所にいたるといふ事みわするましそれ水中の魚の水をいらせ呼吸にあたがひて水出入魚の體内の水に即ち體外の水にしてひれと動かす尾を動かして心にあたがひて進退して水中を遊



躍すそのよくにして人の氣中より居て氣をあらせ呼吸にあそびて天地の氣腹中を出入す人の體內  
乃氣の體外の氣にして手足やうでかゝ心にちぢがひて運速して歩行するのみを氣によりてなり五  
六尺の體に足の大サ尺にたらねどもとひあるきても倒れざるは氣中に在れば也されは天地乃氣の  
わか體中の氣にして天地と間なき道理也故に鼻口を閉れ天地の氣通せざる故息たへて死する  
也それより私欲のへどよりあれ天地の氣閉滞する故天地と間あるや字になり行けわか身乃  
ほろびざるやうのなき道理也天といへは仰ひてその蒼々たるをみれとも天は地をいなれせして人  
は天の中に居るもの也天のかたちあく多々氣のみその氣のあかき居れ天中に居るなりたゞ蒼々  
たるを天とするは遠くをみる故その氣蒼々と見ゆる也やのりそふくとみる天もわか居る處をた  
なす天也さといへ霧のうちにありてわか居る處乃きりをはらせ遠くのきりぞみるよく氣わか體  
をはなれねどもさ目よとへぬ也故に毛と井のうちへなぐれの上り下りいろくはたよひて落  
るもの也あれ氣よとよふ也されの大地にみつるといふも天地にふさがるもみなわか直を以てや  
しなひて私欲の害する事なければ體中の氣浩々然として天地と一樣に來る事といふ也あの處多く  
辞はせついやしてその心を以て察せされはしれぬ事故あらまかにしるしぬ

すべて經營といふもの論語中庸孝經書經易經禮記の類みな一樣なるものにてさまくよとほの  
かわれども何のかかりしともなり此天學三綱領八條目みな千言万語のあもるせりるべし誠は一ツ  
が本にして上天のことのおともかぬといへるもみな誠の事也中庸に聖人の道は端を夫婦に  
なす其至り及て天地に明らか也といふも誠は一ツなり道を學びて身と脩めをして家國へ及ぼす  
も一ツの誠つらぬかされの行われぬ事也さて道におるて待といふ事はなし凡そ待といふもの彼  
と此と二ツにわかれてまつといふもあるものなり田の草の天の雨とまつ池の氷の空の風をまつの  
類也目をまつて見耳を待てきといふものはなすすれ道の外の心はなく心の外の道はなし心  
道とまちて行ゆる道の道にあら老人とまちて行ふも道はあらせすれの名によつて行ふはやはり  
名とまちて行ふなれ道の道にあら家とまちてのひ國を治めんぞて身を脩るは道にあらせすれの名に  
なれば人の爲にする道にあらせといふ事とちりて人のしらうが知るまいがそれらまつ事なくたゞ  
天にはちせ地にちせ心ひろを體ゆるやよして萬の物みなわか心のうちに備はりて天とわれと  
ひとつの誠になるよ至れば心の外に家齊治國の功掌をかへすよりも易くなりゆくとなるよ也

治國

國をおさむるの天下を平にする本にして齊家の又治國の本なり治國平天下をときき傳はも上にて  
老を老とすれば民孝におあり上にて長と長とすれば民弟におあり上にて孤をめぐめ民をむかぬ  
是を以て君たるもの繁矩の道有りとはいひたり是上にてみづりら行ふ事は影の形をいなれを響



さの聲をはなれぬてく下其風になびき行事といひたる也上に在る人老人と老人としてあられみ年  
たけいせとあたけいとたつとみみな子をみなあ子としてあられみ玉への自然と四の海の外まも  
で其風に感化していま迄ぬふり一人の目のさむる如くおきあがりてしたかふや字になる事なりま  
れも其術なきの心にて治國平天下に待事有りて如此すれば中々下にて感化する事はなき也下の  
いたがぬを見て退屈するやうよて誠をいふものにてはならん人の感化せんかせまきりわが心  
よて道をおおふ事なれたれにまつ事もなくたゞ一心にわが人道を盡せば誠に君の徳の風臣の  
徳は艸よて風にいたがひなびのぬ草乃なきそになるなりよまた事はなびかぬとて空よりふく風  
はそれのまつことなき故に一艸一木よてもなびかざる事あらざるに至る道理也さて傳いふ絜矩  
といふの朱子の註にも絜の度也矩の方をなすものと有りて矩のまがりかねのそ也絜のそのかねに  
て物をのりるあとといふ也やりのこの所は初いひ赤子とやいなふ誠の一ツよりほかなき事な  
り定木を出してそれにてのかりたて、人をおもひやるとてもわが身をいどほしく大切におもふ誠  
にて人といどおしく大切におもへはわが身のゆなる事といひ飢ゆる事とふせぐ如く人の身を  
も其如くにおもひて人のいやがる事わがいやがるそくにふせぎ人の飢寒をいどが飢寒といとふ  
そくおもふ是絜矩の道也是にて誠の一ツといふ事とるべしそれ故に民の父母といふ事有り父母  
の子とれもふそく上にて其下とれもへはよしや赤子のものぬものよてそ乃情をこるそく誠に

てつらぬく事也治國は治を乱らうらにして修身の修をいひちがふ事也平天下をいふは天下中方正均  
正とていわやけんちせうち一田地の如く若はんわりの町家の如く有餘不足なきと平といふ也さて  
治國の道の家とり及が平天下は國より及ぼす事といへどもそのうちに法度といふものをなけれんか  
の均正といふに至らぬ事なりその法度多しといへども皆仁の發にして矩の處なりそれ絜矩の恕  
乃道なり夫子の道の忠恕のみといふよてよく考へるべしおのれをつくすを忠といふとて格物致  
知してわが知ひつけてわが好悪みをそ乃正を得るが忠也その忠を本にしてその心をもつておもひ  
やるが恕也わが好悪不正にまてその不正のものをもて恕せんとしていひづみよぬにて物とはか  
るが如く決してやくにたゝざるれみにあらき害をなす事故忠と恕とはいなれぬ事也その意により  
大學にも格物脩身正心の目終りて齊家の目よて忠と仁とめていひあ目の目よ至りて絜矩といひたる  
や天下を平らにするの道のまの矩にてつらぬく事よて誠と仁との道といなれぬ道理也  
齊家治國の章に孝の君に事るもへん弟の長に事るもへんなどのとありて又此所よ老を老として民  
孝におあり長を長として民弟におこるなきいへるの治國を平天下もみな孝弟の道といなれぬ事に  
して堯舜の道も孝弟といへその一人の心の千萬人の心にして千萬人の心の一人の心なりわが性  
もと天の正を得て善なれん五常みなこげ性に備る天下乃千萬人乃心みなおな事なり故にわが心  
をおして人に及ぼすを以て中正の道といふなり夫天ひとり天下を治むる事ならぬ故よ天子を



立て治めし天子天の命を奉て天下とすふるをいへとも天子みづから治むる事ならぬへに諸侯と立てそれ國を治めし諸侯みづからおせむる事ならぬ故に役人をしてこれに設けて治めしむされし諸侯乃國を治め天子の天下を治るは一人の私にあらぬ天の命なりわが才徳によりて天を命せしむる事天下の民堯の子に行きて舜にゆき舜の子にゆきて禹にゆき禹の類みか天乃命せしむる處なり扱又諸侯の身よてくわしくいこわれ諸侯と成りて一國を治むるは天子の命にして則ち天命也その子その孫に至りてその位を保ちその國を有つたれ天命といへども一ツは祖宗の徳なりゆへに子孫其才徳多さらされども祖宗の業をつぐべきはなれは祖宗の徳よりて天よりその子孫に命せらるゝ也子孫を乃才徳なくして祖宗の業をつぐ事ならぬは民をふさひなれて國亡ぶこれ天より廢する所也天下のうち役なしとするものあるは雞の時をつけ犬の盜をくらするを以て天子より下農工商賈をいたる迄その職とする所あり且那役をいひてその役人の一ツ也さるにその且那役になればその職をつとめせしめて之がゆふ事として人のをふく事なりとおもひ誠に金衣玉食して放蕩奢侈をなすを我職とおもふ輩は天より退役れ命かならぬ下る事也そ乃道理もくらしめて多づから不朽此君とおもひ下との不朽の民とおもふされども代々奕世の君みな不朽の君と思ひてつるに不朽とおもふ民の爲にはろほされて之が悪名の多不朽にいさるおろなるの甚しき事なりそれ君より夜陰にめされまたいさましくの道ならぬ仰を蒙る乃せつたきとおもひわれ又家來

をば夜るよびおこして使もあるかせ無理むたの云付とせましと思ふへそれ姑にいびらるゝ嫁も後ちに姑になれり又よめといひるそくなれりゆふも恕の道といふべからぬ人君よくいふ處をはかるべしとか身の藝をならべし屋に居て玉をあけるうへし坐して民百姓の窓をよぶればて、茅のきもあれまさり敷くむしるもよぶれるそくなれるを思ふべしわが妻妾の美をおもふにつけても民百姓の困窮にのみみては妻子をも質におきて年貢といとなみたのれは郷里とはなれず質もちに出るなど終身妻子を見せしうきをみるとおもふべしいよへ民の力もて庭へつき山をせしその臣下これをみて築山の血の山乃みあるといひていさめしそく多君のおどりたのしむ金銀は民の血やあぶらにて民の妻子離散下民の艱難怨のつまるゆ乃也それをゆしらすしてたのしむといふはいかなる心よあれそれ金衣玉食するは君の職困窮うなんするは民の職とおもひてわがあつささむさよつけて民も君もおなしく人なりあつささむさいかあらんと計りおもひて景公の雪降りにかわ衣を着てあやしい哉雨雪三日にしてさむからざるはなんぞといひさる類の事には至るまじわれ國本論といへるに下民のかんなんの事くわしくかきをきたれりこし略しぬ夫民の子にきて君の父母なり子のさむくひたるきを見てゆかまはせしはいまに食ひあさに着てたのしむ父母の天下中になき事也民の父母といふ處よてよく心をつかくして味をへは眞實无妄よりつらぬく所くわしくするへは民の租税の法の時きもみな誠と仁とより出る法



にしてトリカの定めもかゝる所の定めといふ所なり田にも上中下の三段ありていくつのゆりいくつのめんといひ古田新田見やりまたの口米冥加米などいふとくさまくのいあせつけ置て寛と猛との中正になるやうにゆけは桀紂のそりなくして聖人井田の心よかなふ事也その村その里の山や海またの村たち又と川がけ等のやうす地の厚薄を察し又の旱潦又の疫病等の様子にて下とりいひ出させともそれらのトリカを定め夫食をつかはし薬とあたへて民は君君は民といふ心よりつらぬき出れぬ誠の繋矩にあたる事也その外禮樂刑政の類みなこの誠より出て天の四時の行はるゝ如くなれ天下みなしらぎくして自然を感化しておのゝその分をふおうの情願を悉て上下四方みな均しくたゞう成る事なり扱民の疾苦をいふたれくか聞てもふびんなる事とはいへともそ乃實情を察する人稀なりまづいつこの國如此凶年と聞ケハその時ふびんともおもへども左ほさにも思ひて同一ながら一度みざる處の凶年とさけの名もいらぬ國の凶年をきくよりとかくべつ不憫さもちがふものなり又わが住む里のはと遠からぬ處の凶年の聞計よあらせつねに目の接する所へ日夜心にたへせふびんにおもふものなり又わが身一たしくその凶年のせつなきにあへり日夜心にたゆる計乃事よあらせすれんとおもひてもおすられせなけかしく乃みれもふもの也さすれは人君深宮に幽居してはたゝ一通り百姓のふびんをおとふやうなる淺くく事にては中く行とゝかぬいつの事也つねに遠き萬里の外もこが身一たしくそのうちに交るやうふめらされの思

ひやりの出来ぬ事也たゝまれも心にさへせ思ふなごくらひにてはならせわすられせふびんにおもふ誠よお出されの行とゝぬ事也さらば夫食をやり租税せゆるとたらひよかるべけれどもそこにも政をいふ事ありて不憫ながらも租税のおさむべき道理をいおさめさせてまゝ筋なきトリカをいゆるして寛といひ猛といひてもひとつ誠の仁より出れり下情にちがふ事なき道理ありいさ酒のみて遊ぶ席に一人隅にむかひてなげくものあれば百人その興をつくを事ならぬ人情也畜ひ犬猫などいふものにもせよわづらいて死ぬやうすを見ながらそれを見て笑ひたのい美酒のむものいなきやうなる道理にして家中の者ねたど薪に一枚着物を食するやうすと死んでも人君にほとんどやくせぬいかなる事にや國中のもの妻子にいなれ郷里にはなれてなげくをよそにて普請住居衣服器物飼物等のおこりをなすといかなる事よや全く前にもいふ鳥獸の心になるとこの事也さすれの忠恕の道の聖人の道にして脩身平天下の二字よあるをさるべし其繋矩とすれば天下平に繋矩をせされり天下乱るみな得失存亡はあのするとせざるの二ツにとゝまる傳に詩を引て南山有臺の篇の民の父母といふとあらはせしは繋矩を引て天下平なるをいひたるなりその次に節南を引て辟の天下の僂となるといふとならはせしは繋矩を引て天下乱るといひたる也またその次に文王の篇を引て衆を得れり國を得衆を失なへは國をうゝなふをあらはして繋矩するとせざるとの二ツに治乱のかゝるといひてむすびとめたるその丁寧の意識にくりあへしく味ひ考



ふべしその次傳に本末をいひて初の三綱領の末よりいひたるを又あらわしてときたる也人を聚るは  
賊をぞとむかひよりもいひて財のたくへ有りて凶年饑饉にも民乃流離せぬやうに手當をすれば  
子にさむきとき衣を着せひたるきとき乳をあたるきとき誠の父母たる故にをなすれ子たらん事を  
ねがひて郷里をはなれてその國へ民の歸する事水のひきへ流るゝ如くなる事也さてその人あ  
れ其居る土地有り土地あれば又財有り財寶あれば又その財を用ひてその人ぞつくふを君子の  
財をばすれて財は君子をいなれぬいかにとなれ財といふもの土地をいなれぬもの也その土地を  
な君子をいなれぬなりとへは晉乃國にて璧を唐といふ國へやりていつはりその後唐をほろが  
せぬかそかの璧も又ふさび晉へかへりぬぬれぬ覇道の詐術ゆふにもたらぬ事なれども天下の財  
天下をいなるゝ事ならぬ是非君子をいなれぬ道理也傳に徳が本にして財の末なり財あ  
つされぬ民散し財散すれぬ民あつまるといひてあれも一通りのやうなる民なれぬも天をいらぬ  
いかにする事いれぬ事なるべし本は末にして末は本也されぬ本末も一つの道理なりその一を逐  
て行い本を先にして末をのちにするの事なれどもその本末のあとをいへぬ本末も一理あり天地  
も一なるが如く徳も財も一ツなれぬ財有りて民あつまり徳ありて財あつまるあれ一ツ也そ  
の徳にもとづかきえて財をいなしてみれぬ財あつまると民散するにいたるあれぬ財のつみにはあ  
らぬ無徳のつみといふべし今日民のいきてゐるは水火のかけ也水火は天の水火にして仁の水火な  
り水のひやゝかに火のあつきのかたちはちかへども誠と仁との外に出るにあらぬされども人のお  
はるゝ水も人の焼る火もおなじけれども是をもて水火をつみすべからぬ財あつまりて民散せると  
みて財をつみすべからざるが如く君子たかられわするゝにあらざれば徳といふもれよてはなす民  
をなづけ名を揚んとて其名よのへておしき財をまきちらすやうなる名利にかゝるとやはり財計に  
て徳といふも乃よてはなす徳は得とて明德は事なり眞實无妄よりとさ出でてそ乃財をばするゝあ  
らざれば民あつまらぬされぬ民あつまらざるはまた君子の心になき事也此處もわすれざ  
れぬ財をわするゝ事はならぬ事也君子はた誠と仁とをみなり其外の感應の道理のみよて財も  
民もあつまるにいたる事と一なるべし理にさかひていふとあれは先よりも又理にさかひて返答し言  
葉あらに人よいへばまた先よりもおとはあらに返答するあれ其情也貨も其如くに理よもつてさ  
からぬ集めたくわふれぬ又理にもとりて其貨を出す事ある理なりたとへは儉約とて人乃いたみに  
もかまはぬ下情に戻りてさゝ金を出さぬやうにと吝嗇もて金とあつむれぬ下よ至りて大にいた  
むにつき心をむきいなれて私欲をかまへて主乃財をむさばる様になるこれ悖りて入る金をもとり  
て又出る道理也これも一通りたれを知るやうなる事なれども味至て深き事也理よ悖り情にもとる  
いとりも直さぬ天にもとる也天にもやりて勝利せうるといふ事天地あらんかぎりなき事也善に  
福も悪もとさわひするはかけの形ひよきの聲におふする如くかれあれぬ道理也さ貨をば

ふべしその次傳に本末をいひて初の三綱領の末よりいひたるを又あらわしてときたる也人を聚るは  
賊をぞとむかひよりもいひて財のたくへ有りて凶年饑饉にも民乃流離せぬやうに手當をすれば  
子にさむきとき衣を着せひたるきとき乳をあたるきとき誠の父母たる故にをなすれ子たらん事を  
ねがひて郷里をはなれてその國へ民の歸する事水のひきへ流るゝ如くなる事也さてその人あ  
れ其居る土地有り土地あれば又財有り財寶あれば又その財を用ひてその人ぞつくふを君子の  
財をばすれて財は君子をいなれぬいかにとなれ財といふもの土地をいなれぬもの也その土地を  
な君子をいなれぬなりとへは晉乃國にて璧を唐といふ國へやりていつはりその後唐をほろが  
せぬかそかの璧も又ふさび晉へかへりぬぬれぬ覇道の詐術ゆふにもたらぬ事なれども天下の財  
天下をいなるゝ事ならぬ是非君子をいなれぬ道理也傳に徳が本にして財の末なり財あ  
つされぬ民散し財散すれぬ民あつまるといひてあれも一通りのやうなる民なれぬも天をいらぬ  
いかにする事いれぬ事なるべし本は末にして末は本也されぬ本末も一つの道理なりその一を逐  
て行い本を先にして末をのちにするの事なれどもその本末のあとをいへぬ本末も一理あり天地  
も一なるが如く徳も財も一ツなれぬ財有りて民あつまり徳ありて財あつまるあれ一ツ也そ  
の徳にもとづかきえて財をいなしてみれぬ財あつまると民散するにいたるあれぬ財のつみにはあ  
らぬ無徳のつみといふべし今日民のいきてゐるは水火のかけ也水火は天の水火にして仁の水火な  
り水のひやゝかに火のあつきのかたちはちかへども誠と仁との外に出るにあらぬされども人のお  
はるゝ水も人の焼る火もおなじけれども是をもて水火をつみすべからぬ財あつまりて民散せると  
みて財をつみすべからざるが如く君子たかられわするゝにあらざれば徳といふもれよてはなす民  
をなづけ名を揚んとて其名よのへておしき財をまきちらすやうなる名利にかゝるとやはり財計に  
て徳といふも乃よてはなす徳は得とて明德は事なり眞實无妄よりとさ出でてそ乃財をばするゝあ  
らざれば民あつまらぬされぬ民あつまらざるはまた君子の心になき事也此處もわすれざ  
れぬ財をわするゝ事はならぬ事也君子はた誠と仁とをみなり其外の感應の道理のみよて財も  
民もあつまるにいたる事と一なるべし理にさかひていふとあれは先よりも又理にさかひて返答し言  
葉あらに人よいへばまた先よりもおとはあらに返答するあれ其情也貨も其如くに理よもつてさ  
からぬ集めたくわふれぬ又理にもとりて其貨を出す事ある理なりたとへは儉約とて人乃いたみに  
もかまはぬ下情に戻りてさゝ金を出さぬやうにと吝嗇もて金とあつむれぬ下よ至りて大にいた  
むにつき心をむきいなれて私欲をかまへて主乃財をむさばる様になるこれ悖りて入る金をもとり  
て又出る道理也これも一通りたれを知るやうなる事なれども味至て深き事也理よ悖り情にもとる  
いとりも直さぬ天にもとる也天にもやりて勝利せうるといふ事天地あらんかぎりなき事也善に  
福も悪もとさわひするはかけの形ひよきの聲におふする如くかれあれぬ道理也さ貨をば



此心汲して人もさまをと思へば人の物をうめてとるといふにいたらば人の損をしてわが得するにつけても己がせんをするの迷惑なるよつけて人の損をするめいよくせしむるべし人にも何れといふにいたればそれの鳥獸乃分別故いふにたとらざれども人もおなじく人なり天人も一ツなれば四海も兄弟にして彼をいひわれといふも親疎なけれはわが損も人の損にして人の得もわが得なり物を我とのへどてあれは絜矩といふものゝその間にたかれぬ也物と我を一ツになりて絜矩といふものそこよておるゝ事也されはわれひとり富んとすれは人となほ一人損とさせて手前のみ利をせんとれもふ故人をむき畏うらみ天いりてつるに天の禍を穿くる也損の上みとまゝ益の上と損す上を損して益すの理にあたるべしそれ金の天下の金にして一人の金にあらざさすれは天下の金のわが金なり徳有るものは天下の財を用ひ一人の金にせんとすれはわが身の持所の外一金の金なり天下の財を用ひわが身の外の天下の金みあわが用となすなりまた國を治め天下と平とするものゝ己が用を節して天下のたくいへせしめて天下の民を生育せはあれまた一人のたくいへになさるる故本正しくして蓄積もとり出るのうれひなり今時諸侯の儉約と稱するは家臣の録をへらしわが妻妾及び耳目の欲にをなへまど不足として民の膏血をとりはりて欲にをなふりる故人うらみ天いかりて悖り出る事たへせそれよも懲りて利をかんがへ益とせんとおもひて下と損して上とまゝ義と欠いて利をとらんとすそのおろかさいふべからせ我用金をたもひて米の直

段を考へ米價騰貴して下民の困き字するをゆりまひす金あるをもつて善計とす商賈の利を射るがあとこれ上下利とあらそふやわが臣民と疎と多て金をしたしむわが命のかゝる五穀と疎として金と一たりみわが九族を疎にして金をしたしむつるに五穀みのらぎ金くらうべららば臣民をふきて金ひやりはさらかき九族をふきて金は力にならざされはつるに金をうらなひ身をほろぼすに至るなりもと國の蓄積の國のためにしてわが一人の爲にあらざされは國家の臣民とくるゝめて蓄積となすのいかなる事とやあらん金の土中に有りて人あれと鑄て金とす人貴む故にわれ是と貴む人いやあめはこれひとりたはとみても金のせんなりわが貴むも人よるなりされは金の人ともいせされは金の用なり堂たる諸侯千斤萬斤の金を掘て商賈の名を得禽獸のそりせうけは諸侯たらざるのみならずせすでも人さる事あたはすれのれひとり人たらざるのみならず國ほろび家うらなふ國家なくなりて金のたれが金にやならんさらふべし扱手前ひとりにて天下の金とせりあつめたらは天下金を用ひせりて外のしなをもつて金とせはいまおさむる天下の金は土芥のそくなるへあぢとむかひ乃金のかくの如しといふるしよなる計にて金の用のあるまゝ人とせもに天下とせもにする故金といへ一人の金といふものならは何の貴き事もなかるべしあゆへは楚書にも楚國のたのらとするものなりたと善とたからとするとはいひ舅犯も親をいつくしむと以て寶とするとはいひたりあれ則人のいふ利は利にてなくかへつて害を生じ人のいふ益は益とてなくかへつて損



をなす善なれば人をも得土をも得財をも得不善なれば人をあぬまゝ土も財もともけうゝなふみな  
 天の命といふものあり大學の傳こゝに至りては財にも藜矩を用るときたる也○治國平天下の道  
 は忠恕の二ツよしてみな誠と仁となりされどもその徳その政その人といふ事備へられは堯舜と  
 いへども天下を治むる事ならは堯舜の聖といふのよき人をあけて人の善を用ひおのれは垂拱無爲  
 にして上にまじくたるを以ていふ也後世の君の治平は心なれば察を明と利口を智と姑息と  
 仁とあ人家を勇をばへこれと以て平治してその名その功堯舜より多うらん事そのむむの多し  
 これの堯舜のあとをあたふにて心をうるよていふ内多欲にして外仁義を施すの類也凡察と明と  
 の黑白のたがひ也されども少く智ある人はそれ智にはありて何とぞして人の屈服するやうとおも  
 ふによりてさまざまの智術よて聰明とすれどもせんなき事になる也明の日月乃如く察の紙燭の  
 そく日月にてらさぬくまなくして天下萬民日月の明によりて生くをなす也紙燭の手に持て左をみ  
 れの右をくらく右をみれ左をくらくしていたづらに手と勞してもやうやくかたの明らなる  
 乃みなり人君のくとき居て明らかなともいひ君子の盛徳は愚なるが如くともいひてくらさども  
 つてやしない天下の明を以て明と天下の智をもつて智とす其明つさき其智いよくさかんによ  
 て勞せしめて明らかなつとめせしめてさかんにいたるたわが君わが利を何にもごがといふ字のわ  
 すれぬうち明も智も勇も何もかも得る事よていなき也かるにわが辨口をたのみわが位は高

にはこりて人々下視してみづからひをり尊ぶとせざるの誠にいふにたらぬ事なり君子さへあやまち  
 ある事なるに兎角やまら仕落ちとはぢて人我にまかせて人我諫言をふせぎておのれにかつ事を  
 せせられも身死して國亡ぶにちかき事也一國のひろき萬事のけきと一人志てなさんとするの誠  
 に天の雨を一人にてふせぐが如く無益の甚き事にして其下も才智をあらはさず手を空しくして  
 君乃事をまつやうになり行也たゞ在知人在安民といひて人々よりて其役を承たへておさめさす  
 るはあれ衆智を智と衆善を善とする聖人の道にして物我の間なきよりおある事也扱又初めい  
 ふ人我のみの人君のいふよさらば又何事もかまひ修して金衣玉食を職との心得人をとりて其  
 政柄をあたふるにあらば其役を世にさして賢愚とをたうんくとのみいひて國家を  
 他所にまゐるれ君もありたとへていひとらんくといふ病者の死するにちかくらんくといふ君の  
 亡ぶにちりしともいふべきか田を耕して苗の長ざるやうにとおもふあまりにぬきて其苗の葉末の  
 外より高からんとするも苗をうへぬにおな事也又田をもちても耕さぬうへされはまた田の  
 せんなくあの二ツしなにかわれとおおな事也人君の名利に走るも國家にまはぬをなにかの  
 れども國家の亡ぶるにいたるは同ト事也○人を用ゆるといふも誠と仁と二ツに出でてわが明  
 を以て人より人よりてあけ用ひ其才よとりて其職をあたふ事計なれをも人よりるも愛情にか  
 らわらす誠の明德にうつしてみるにあらされは人よりぬ事よ才の得手不處手よりぬ事也を



の職に任してまかせ置くも其人を以りて寛仁をもつて任せざれば賢才も力を盡すにいたらぬ也職  
 をあたへて又そのひちをひくや字にて賢才も向くみて其力を出せぬなりまたその職其録其才に  
 應せざれば千里乃馬常乃飼料の多くあつるやうにては才あるものも中々その力を出さぬもの  
 也さうまれら乃本といへ物我の間なくあて誠と仁との處より出るにあらざればたゞ末のとのに  
 してりてみな覇術のそくよなる事也傳に書の秦誓をひきて一個の臣あらんに其貌を斷くと誠一乃徳  
 有て其外に何乃技藝もなければとさそその心休焉と人欲なくして人乃技あるをみてわが身  
 にある如くてうほうに大切にして人の彦聖かるをみては心中よりたゞ是をよみてとみ彦聖の人  
 のゆふとせの宴によくいれ用ひて直に己が口をとりいふとくは心中よりおれをよとす如くの如く  
 の人あらん君の子孫も長く保ち黎民の末々迄もみな利有べし人の技有るをみてはをみそねみ  
 人の彦聖なるをみては其いふ所にたがひてそれ才其情の通せぬやうよ誠に少くもいれ用ゆる  
 とあたはず君の子孫をも長く保つ事ならぬうへ民の末々までも甚あやうかるべといひのせ  
 たりたむわれなく人なくといふ所より人の善言のわが口より出る如くに思ひ心の斷り休むたる  
 所子孫代々のさかへをなす生民の末々迄も利澤を蒙るやうにあるべといひ一誠にありがたき  
 事也たゞ仁人といふものよく人を愛よく人をにくむといひてこの如く善をにくみねたむ人を  
 は放流して四海の外へりぞけて中國をとよせせ善人といふあけ用ひて天下をもあたふるにいた

るさ人に向つてから善と悪とのみの事也あつる人をにくむか己のさよりにくむれば仁なり人  
 を愛するも尤かわゆさより出るこれ仁なりいま姑息とて子をかねて灸をすへむ甘き物とあ  
 たへてむしもちにするの姑息をて婦人の仁ともいふなり人どころしてもか己のさよりおこれのや  
 かり仁なりいまいふ姑息との黑白のたがひにして公と私と義と利とたがひより出る也この秦誓  
 をひきて善とあつるの利は子孫に及び善をあるまぬ害は後世おなかるゝとせきたりおれも繋短す  
 るとせざるよよる事也民の末々迄もあやうらんといひたるは國の本の民なるべし民乃  
 あやうきといわんより害をうると民の虐をうるとかといふべきにあやうきといひたるは民害をう  
 くれの國天下のあやうき事故に民もあやうらんといひたる也善をこのめは天下に優なりとゆ  
 孟子にいひて善をこのむの無此上善徳にて物我無間にいたりて善をあるの心事はなる也人の善をよ  
 くみねたむとこれほどの悪はなす善人を害し善言をふせけのそのさざわひと流す事後世にたよひ  
 てやまぬ事也その善人をにくみねたむ人を四ツの海の外へ放流する人をおろそかて貨をぬむ  
 のつみまあらざる故死罪に處せられぬ故に人なきの境へ放流してその悪人も人なき地に居れば  
 悪もならぬまはなつといふ也中國よりあらざるといへどもおなすく人のをる地の其害をうくる事  
 聖人やりのさのよくにおもはるゝまゝ四海四夷の外とはいひたる也これにて聖人一視同仁の徳を  
 いるべし



それ國家をたぐへていはと車のこゝ國家のおもた車の荷の重さが如しそのたもき荷どのするなれは其車の輪も多くなるへきに兩輪にすぎせいで遠き似ひきおもきとのするも一ん木と輪との二ツ也一ん木の君也その軸のゆる、輪のうちは大名家老の職也輻とてそとかの輪と軸へあつむるが群臣の職にしてそとかの農工商賈の職なり君と家老とのゆるんば口にもいわれざるまきあんないになれ群臣もそのうま風うつり農工へもそのうまき風おうつりそれ故に車のあぶらさしてよき加減にするの學問をもて其道のよきを處するごとくなり軸も一不直有れに兩輪うごかき君不直なれに臣民手足の如くならざるがごとしその兩輪一ツもかけ又はは輻のうち一ツも損する様になれに傾敗しておもきをのする事不能その軸の直なるやうにしてむらもなく削りあぐるの格物よりして脩身の段に於て明明徳の之け也最上よき削りかけんに於て扱其輪へとほして宜しきを見はからひゆるからせきまぬ所にくさびをさすのまれ至善に止るの段なりさてその輪よくめぐりゆく齊家より平天下乃段よきて新民の之けなり上に一とよき職よして國家塩梅の職に家老也その家老と君と乃塩梅水魚の如くにいたれに下情もおのつから通ざる事とてはの輪を輻とつて軸にとするよとならせその輻のうちには郷方の役人も政事の役も皆さまく有りて役くみけさ人々つゝみて一ツの輻もみな直にトやうぶにあらされに車のつとみなき也されは軸あれのとて車の用のなく輻ばかりよてもなく何もかもそろひて衆心衆力のあいもちのつよき所より重荷を

のせても傾ぬよふになる事也これにて國家君臣のなを推して知るべし扱その大切の軸にて君なれをも君よりの軸よりも大切なるものは車といふ名と國家といふ名なりされどもこれと軸は輻ととり乃けてみれに車といふ名のあき如くされは君は臣とせりのけてみれに國家といふものいなしされども車といふ名家國といふ名あるよきて君も臣も軸も輪も出來たれば輪正しからざれにとりかへ輻よからぬあらはとてかへて車のよさかぬ様にする事也軸有りての車なれども車ありて軸の貴きもある道理なれに國家ありておそ君といふおもきものゆる也されは君不道ならに明を立昏を廢して國家の長久をいかるべき事にしてあしき軸ととりかへても車はかたふかぬやうとする事也軸ばかりにて車といひがたき道理にして君計にては國家といひわれぬ也いま駕籠にのる役なりといへども人が其駕籠をかつけいおそ駕籠にのる役といふもたてわれ計駕籠にのる役もおもへどもかたきみおそ其駕籠をうち捨てにぐれいつ迄もわれこそ駕籠にのる役もいひても一人よていかにせうごかねいつるにかたよを出てありきて行べしあれによりて駕籠にのる役の立もかたきのある故也といふををるべし臣ありておそ君といふものもある也臣なくは君計をいつ迄君たらんとおもへども一人にては君にいなられぬなりそれには不心の君不朽の臣とおもふいかなる事にやあらんたましくわが如き不徳のとの祖先の餘澤をもつて君たる事を得れどもその徳その才をいへば中々天命をうくる事なきいつのわれなり天地の人け同く天地より生るゝ故







乃政をとひしにも孔子つくるに食と足すとひまめと一玉ふの類食貨の生民の道にて一日もなければならぬ事也されども國をたもつもの利を利とするやうになれば民を剥きて自奉するやうになるまゝ悖出るのできはひありて上下利をあらそひて國みたるゝにいたる故に深くその義利の辨をあらわしたる也孟子のひまめは義利を辨し此傳の終りに義利を辨するにて公私善惡存亡禍福をみな義利の二ツよりおこるせしむるべしそれ義をもつて利とすれはその親とすてその君とのちにせむ惟義のあるまゝなれは一ツとして利にあらざる事なり程子のいわれは義の安んぶる所は利の有る所もこの事といひたるなを凡そ治國平天下の道に足食生財本とたつとひ用と節するは一日もはなれられぬ道理なりその財を生る道とていまいふ勘辨算用此といふ私智にて乃曲計にていなりその財といふは五穀にもせよ何よをせよ本とする農民おはけれはむなき地もなくあまり一田もなく繁昌一に行けはこれ財を生るもの衆きなり其上に居る役人の類俸位とておらりとて誠にあそびて食する如き人少なければこれその食ふもの寡きなり農時とさまたけすそのなりをひをせいでいくち飲酒遊惰の風なければその業をはげむまゝ財を生るものゝとさはやれをいふもの也その財を用ゆるもの出入の度と定め費をいふさきりて質素を本とするやうになれは是れ財を用ゆるものはゆるやるといふもの也如此なれは財用のたらぬといふ事なりそれといひて生之者衆食之者寡爲之者疾用之者舒則財つねに足るやいふなりそのこれと食ふ者寡きといふ俸位といふといひておらりせし居る人なりそのみとけにいまいふ小普請れ如きいおらりとて石録といふものとるものもあるやうに至る也この故に道とてくいに至りてかたき事也をろよりの農民よりも登用さるゝ事なれども日本にては武士といふものありて其職役をあたへぬは小普請とてさてこれやちよる人才を見出す事故也その小おらんをいふの人才の藏といふものにてなかゝおらりとて食するといふべからせ况や國家の大切にその手その手につきて國家の備禦となる事故大切ある役といふものなり俸位乃人の遊びて食するといふの類の奥向の女の類妓藝の人などおつめて石録とあたふの類といふ事也いつ方も奥向の女は襄世におよぶほど大勢になりて次第に國用の不辨になる本なり○仁者といふの財は天下の財として一人の財とおもはぬやへ財下へ散らして下向つまり下あつまりて上たつとる不仁なるも乃は天下の財と一人の財とするまゝ身と財のために屈しけがれてさて財をあつめんとす仁者も財をわすれて財仁者をいなれす不仁者の財を思ひて財つねに不仁者といなるまゝに財を得んとして盗と所業になすより其外曲計を以て身を不義に入れても財をあつめんとおもひ財あつまると己が身はろぶる事とらざる也上に在る人仁とて乃みて下とめくめはその下さるもの義を以て上につかふる事を好まぬものなきなり下義とてそのおやうになれは天下の事何事も成就せざる事なりされよて義をもつて利とするといふ事をのべたる也上よて下へあつめくめは下また上へあはく奉るまゝ民あつまり土地ひろくなり財はほくなれは義は



則利なりトリカをつよくして運上をませば次第に人民離散するまゝ戸口減して土地せばまり人少  
して財生せざれり利といふもの利にていなき証據也あれ義なれり天下の財みなわが財なり利な  
ればわが財もみな天下の財になる事也それを傳ふも上仁を好みて下義をよのまぬものなく義と  
あのでその事終はらざるものあらば府庫の財を乃財にあらざるも乃のあらざるといふなり  
かるにいま勘辨善計と稱えてひそかに民をはきとる工夫をめぐらさざるといふ民をあさむきて其子  
の日夜なげき離散するをもかまはせしなりや金をおさめて盗人をもとられぬやうに堀をほ  
り屏を高ふすれり悖りて入財故つるまゝ悖りて出るまゝ利とおもひも不利なるのみならず害と  
生ぜ誠に聖賢の道といふへつて淺くしき事にして經濟の道はよく利なる事なと思へとみな大學  
一書の外に出す扱ふ有がたき事也傳ふ魯の太夫孟獻子の事とひきて馬乗をかふくらるの家に鶏  
豚を祭せせとてあれり太夫といふよなれば車よのりて四正の馬に駕す位の人祭せせとはい  
りよたぞわいてそれをもつて身代の助にせんといふやうなるいやしき事はせぬといふ事なり祭と  
いふ氣をつけてせわをする事也伐冰の家には牛羊をやいなせぬといひて伐冰とは太夫より一段うへ  
のくらゐといふ法事杯乃料理に氷室の氷を出してそ乃味の變せぬやうにする事にてやはり旗本以  
上大名以上なといふやうある格也まの牛羊をかひぬも鶏豚の意味也百乘家には聚斂の臣とやいな  
ぬ聚斂の臣あらんよりは盜の臣か有るかちトやといはれしなり聚斂臣とは今いふ勝手直

いなどいふものごとく山からも川からも運上ととり百姓などへ免をまゝととりおぼめみな上へ  
引あめる事也盜臣といふ上の財をぬすむ私欲をする役人の事也扱ふこの意味は仁人君子の至誠至仁の  
心をとれたる事にしてやむことを得ぬ情といひたり仁人君子の心もかふも下のいたむ事はど  
ふもいふのばれぬまゝ下の利をいとむもの故その利を利となせせてその利をあらそふとなくする  
なり其録有るもの録にて物と辨むるが天命也商のあきなひの利をもつて物と辨むるは天命也農  
の田を耕して五穀の利をもつて物と辨むるが天命也さるに録をくらひてそでに馬車もつ人また大  
夫乃上におるくらいは人雞豚をかひ牛羊をかひ菜園をつくりて下と利をあらそふは天命にあらざ  
る事也わがけのひとり殺して一日の食より菜園の菜をもつて一日の菜にすればそれだけ農商の業  
を奪ふといふものなりわれ録ありそれ録を以て物と辨むればわがどゝのへるとあるの菜にて人を  
その業を失ひぬわれもその事とたすなり我ひとり利せんとする私心より何もかもわが物にして辨  
せんとするはまことに利を利とするの何さましき事也武士として金をめり質物とつけて産をすの  
類みなあさましき乃甚しきにして人我あるゆへよりおある也又大名ともなりてわが知行有ればそ  
のおさまる所乃財とつて物を辨むるが天命なりさるに下乃利をもみな上へ引揚てひとり利を專  
しせんとするはわれ人我乃甚しきよて義乃利たるをあらざる也故仁人君子はたゞ下れ生をなさ  
ざる事とすれひてわが財のへる事をは忘るゝなり故にトリカつよき役人あれり上の勝手の利かる



やうなれども至誠至仁の心への氣のよく不憫にせよふも忍はれぬ多し、またしも己が財をぬすむ私欲の役人乃方が多しとやと思ふといふことろなりされらるる至誠至仁の内情をあらわしてあるとバにせよふのべられぬ言外の意をふくみざる也わが財の耗るのいやに殖るはよろあふ心の凡人の情也されば己が財の耗るのいやなれの上へばかりとりあけて下への者の財のへるはさぞいやなるへいわが財の殖るのよろあふものなれの下へあつくめぐみて下へ利を利として樂を樂みて妻子をさむつ下をさむつこふべしわれも人なりわれも人なりこれひとりよき事として人みなぐるゝむいかにあらんたとへ私欲する役人わがたからせぬすむにせよそのわざのひの下へいいたらぬ事故損たにおもへいまだしも也たは財のふへるよもせと億萬の人のかなしむはさぞもきくにと見るにも一のわれぬといふ至誠至仁の心よえて則心天理といふに至る所なりされ繋矩を以てつらぬき説たる事なり國家乃主となりて財用をのみつぐるむに小人を用ゆるよりおあるなりその小人として國家をおさめさする役人になるやうにすると目前にトリカもふへて利のやうなれども下をむきて一揆となる或は強訴し又の貧にせまりて盗をなす火を放ち家中の武士も武をすてゝみな利に走れば上にも下にもみな利をあらそひて下へ上へさせたけ又はおびやかすまたのすきさへ有れの上の財を得んとし上にも威にまかせて下をとるやうになるまゝ上も上たらせ下も下たらせ士より農工商賈もいたる迄みなその業を廢し誠は人にくみ畏うらみ天よりささはひせ下へ玉ふによりていよく人々困窮し國用不辨となりて國も君もほろびてその小人もどもにはほろびておまふ也この段にいたりて善者なれどもその小人の政柄國權をとるとはは何とも仕様もなく手をつかねて國家のほろふるを見る計也されによりてみれば國家の利といふの利にてなく義をもつて利とする事にして君の君臣の臣父の父子の兄弟の弟夫の夫婦の婦國友の國友にしてさて士の士農の農と上下とを義のあるまゝになりゆけのされ國さのへ君やすくして上を富み下をとみて天下平し至るなり繋矩の道は則天下を平にする曲尺にしてその本の至誠至仁の天理全く己が本然の明德明らかなるよりしておしよふ事也義利の辨は人心道心の辨にして忠恕の道心の發誠に上天の載五おとよなりかよなれその理をゆへに理におち辨をいへは辨におつ三綱領八條目と一ツにして聖人授受傳受の蘊奥またこれ外ならせまをくりかへしあつく信をふかく味へいよく高きよく深くしていよくひきくいよく淺く至て大にいたつて小にして言語文字の及ぶ所へのあらざる物なるべしとむものよく心をひそむべし



天明四ツのせゝいとま玉のりて白川の城に居たりけるに政務のひ  
まあれの大學の書を講じてかたの人の人へも聞かせしかそのいひ  
述さることはもほと經てのじするゝまゝかい付てこそと人のこひ  
しよりて三綱領八條目につきていひたるのはと筆まかせて  
かいせゝめぬもとよりおろかなる心つたなき筆をもて聖意のくま  
くかいのらひす事は及ひもなけれはたゞ或問の意をとりてさま  
く乃事ちりきたとへと交へ室先生の雑話なととくひへてあらは  
るぬ誠に井蛙のそりまぬられきたき事おして赤面慚愧の至りた  
へ侍らぎよむものじかやれたるうちに聖經にたかひたる事あらは  
とく改めけつりて正し侍るへい

于時文化八ツのとり初春のおろうつしはへりぬ本の文よりやまれ  
る文字もあれとそのままゝ耳かい付のへりぬ讀ものよく心を用ひて  
見るへい



如此書あるをいそ今更反古堆裏よりとり出してみればや四十餘  
里三つになりぬらんよくみれば治國の説紙上にてたゞのかりのへ  
たれにくくかゝんとすれは諸侯の經濟を論するに似たり紙上  
の論にては善實ならず眞世山の衍義も平天下の條を省くのとわれ  
も又治國より外の清書せずもと童蒙等にとくはの等をこゆる論も  
あれはなり

文政九年八月廿二日

樂翁

明治廿五年二月廿八日印刷  
明治廿五年二月廿五日出版

定價金六拾五錢

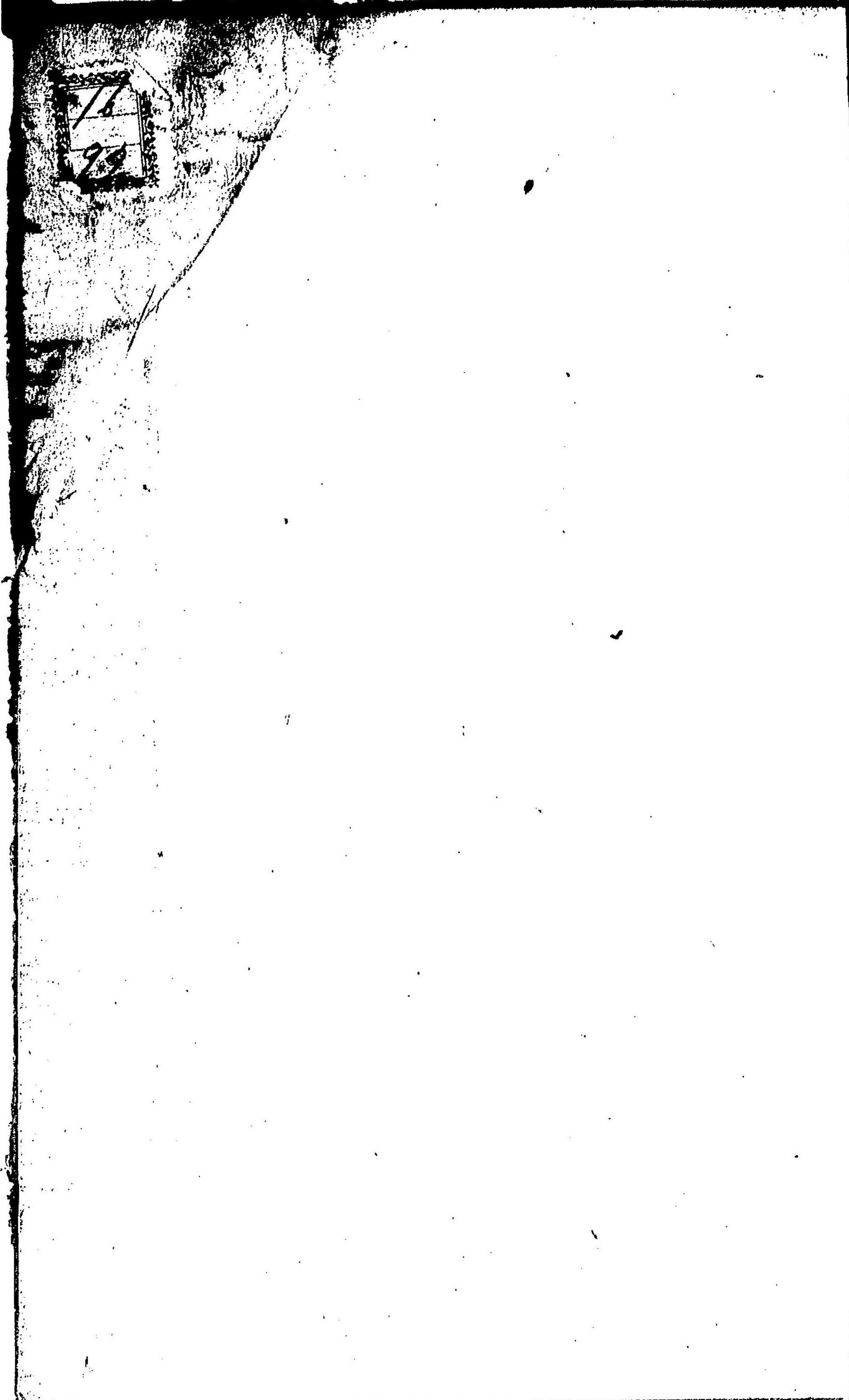
版權  
所有

印刷兼  
發行者

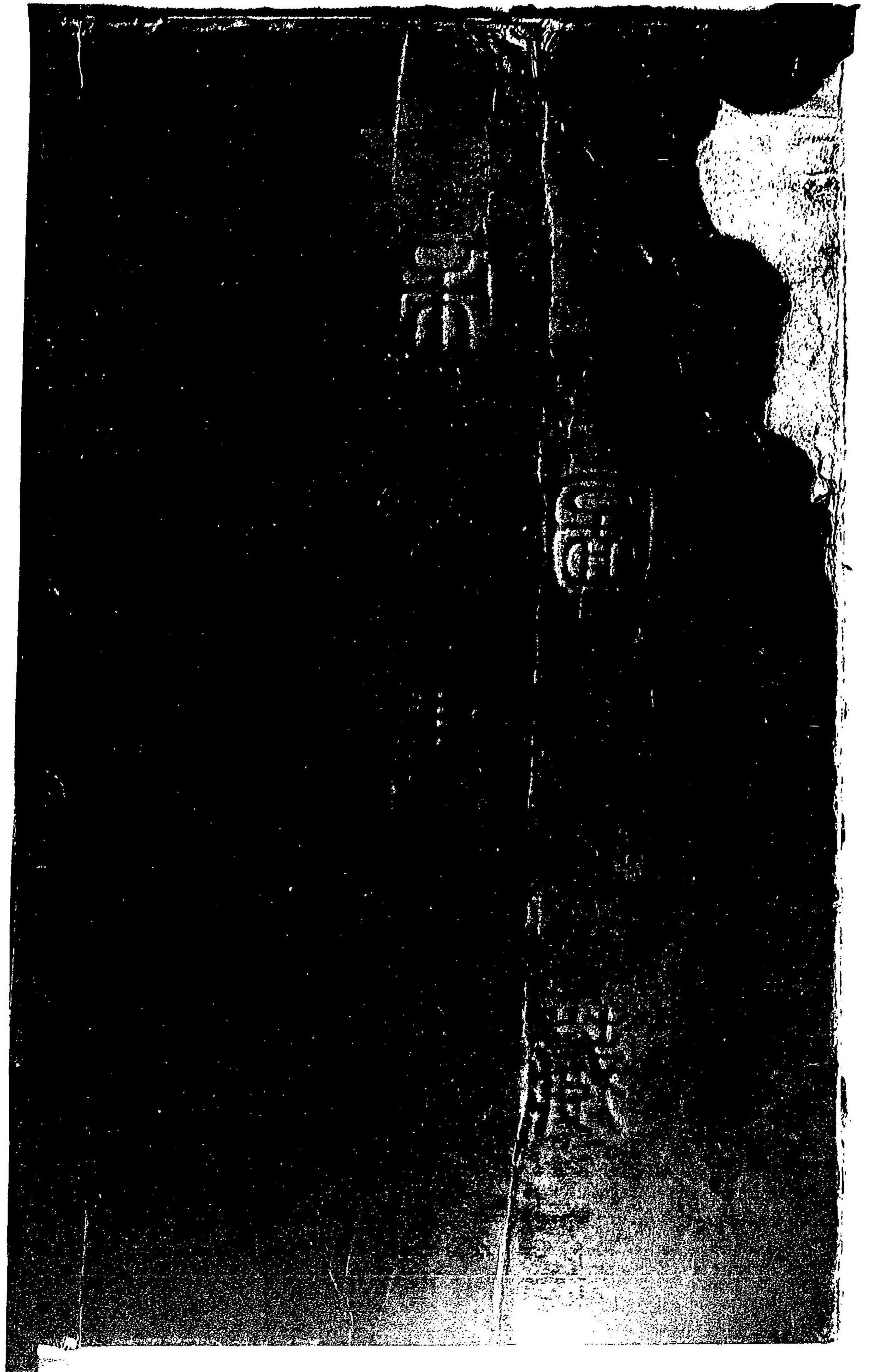
小林二郎

新潟縣新潟市東仲通一番町  
第四十二番戶











008594-000-5

16-92

大学講義 ( 楽翁公口演 )

松平 定信 / 著

M25

AAC-1459

